

山びこ通信

お陰様で
次の10周年。
年へ…

しぜん イタリア語 ラテン語 ウェブプログラミング
歴史 ギリシャ語 かいが 調査研究 理科 数学
ことば つくる ユークリッド幾何 山の学校ゼミ(社会)
英語 かず フランス語 ロボット工作 漢文 ロシア語

お山の幼稚園から山の学校へ、そして

中務哲郎

山の学校開校 10 周年おめでとうございます。山の学校の尊い活動を心の中で応援して 10 年、ということになりますが、園長先生と私のおつきあいはさらに溯ります。現園長の太郎先生とは、西洋古典学の同学・同僚でしたし、前園長の一郎先生には、1980 年代の末に子供 2 人がお世話になっているからです。

お山の幼稚園の特色はあまたあるでしょうが、私が最も深く共感したのは、園児が家から山の上まで歩いて通うことと、園長先生指導のもとでの俳句の暗誦でした。大学生の国語力の低下が嘆かれて久しいのですが、その根っこにある原因は、家庭における幼時の過ごし方ではないかと考えられます。家族のあり方が三世代同居から核家族へと変わり、幼児が家庭内で大人と語り合う時間が激減しましたし、カルタや百人一首といった、言葉の感性を養う遊びもすたれました。習字の稽古を通じて知らぬ間に和歌や漢詩に触れる、ということもなくなったようです。しかし、そのような世の変化は嘆いても始まらず、如何ともしがたいものです。そんな中で園児が俳句を暗誦するは、暗記の習慣を身につけると共に、美しい日本語表現に関心を寄せるための最適の入り口でしょう。

現今の交通事情では、子供が路上で缶蹴り、隠れん坊、縄跳びなどをすることもできません。巧まずして体を鍛えることになる遊びができないのも、今の子供たちの不幸でしょう。しかし、お山の幼稚園の石段を毎日上り下りする子供たちは、木登りができない、真っ直ぐに走れない、というようなことはないはずで

お山の幼稚園の教育理念は変わっていないと思いますが、翻って、私が 30 年身を置いた大学の変わりようには激しいものがありました。1991 年、大学設置基準の大綱化と称して、一般教育と専門教育の編成が各大学の自由裁量に任されるようになりましたが、その結果は、教養教育のなし崩しの崩壊でした。かつて教養教育の大きな柱であった外国語教育の後退は、とりわけ眼を覆うばかりです。大学は、学生の学びたがらない外国語、英語以外の第二外国語の必要単位をどんどん減らします。学生のやりたがらないものは減らす、という発想は大学入学試験にも現れています。高校生が勉強したがるない教科は入試科目から外す、と。近年の大学はアドミッション・ポリシーと称して、どのような入学生を求めかを明記しているにもかかわらず、敷居を高くして受験者の減るのを惧れて、大学の求める高い基準を掲げることを避けているように思えます。教養教育にしても、学生に不人気だから廃するというのは考え方が逆で、大学としてどのような教養を備えた人間を育てたいかを示すべきなのです。

もう一つ、180 度変わったのが産学協同ということです。大学紛争盛んなりし頃は、学生が産学協同粉碎を叫べば、大学側も聞く姿勢を示さざるをえなかったのですが、今は産官学協同に異を唱える声はどこからも聞こえて来ません。協同によって研究が進み社会に裨益するのは結構ですが、直ちに実利に結びつかない基礎研究が軽視されることと、学生が産(企業)に就くことを求めて 3 年生の時から就職活動を始める風潮は

寒心の極みです。大学が学生に勉強することを望む機関であるのならば、声を上げられない立場の学生ではなく、大学こそ改善に取り組むべきでしょう。機械技術の進歩は留まるところを知らず、世の中は便利になる一方ですが、私は便利が一つ増えれば、その蔭で失われるものは何層倍もあると考えています。(スイッチ一つでお湯がふんだんに流れ出る、その便利のためにどれだけのエネルギーが費やされるか。[子供の頃、姉弟4人が朝起きると、母親が薬缶に沸かした湯を四等分して顔を洗わせてくれた。その思い出の方が瞬間湯沸かし器より嬉しい、などとは言わないでおきましょう]。高速の乗り物で速く目的地に達する、しかしそのためにどれだけ旅情が失われるか。書くことを止めてキーボードの漢字変換のみに頼っていると、どれほど漢字を忘れていくか、等々)。しかし、否応なく便利なものを使い、あるいはそれに使われざるをえないこれからの世の中で、最後まで必要なのは、自分の脚で歩き、自分の頭で考えることでしょう。一郎先生の教育は、幼い子供たちに身を以てそのことを覚えてもらうことであつたように思いますし、太郎先生が山の学校を開かれたのもその志を継いでのことであろうと思います。「しぜん」「ことば」「かず」「つくる」・・・シンプルなクラス名称は、子供たちに何が一番大切かを語りかけています。また大人のためのクラスでも、大学では考えられないような高度できめ細かい授業が行われています。大学の現状にあきたらない大人たちも、ここで渴を癒せるでしょう。私などは「教育の根は苦いが、その実は甘い」というような考え方で育てられて参りましたが、山の学校は「Disce libens (楽しく学べ)」を motto にしています。

大学に不満を感じながら何一つ変えることもできずに退職した者として、山の学校の理念と方法に期待するところ大きく、山の学校のますますの発展を願って止みません。

(京都大学名誉教授 西洋古典学・中務哲郎)

山の学校・時間割 (冬学期)

・クラス名横の (P～)は冬学期のクラス紹介のページです。ぜひ一読下さい。
 ・ただし掲載のクラス名は、春学期の予定ではございません。春学期時間割は別紙をご覧ください。

	午前 (9:10-15:30)	1 (16:20-17:20)	2 (17:30-18:30)	3 (18:40-20:00)	4 (20:10-21:30)
月	将棋道場(イベント)(p26) (月1回 16:00~18:00)	つくる(p12) (16:30~18:00 隔週)	漢文入門(p20) (17:00~18:20) 何でも勉強相談会(イベント) (月1回 18:30~21:30) 英語特講義(イベント) (月1回 16:40~20:00)	イタリア語講読(p20)	ラテン語入門(p23)
火		しぜん A(p10) かいが A(p11) (15:50~17:20 隔週) かず 1~2年A(p15)	ことば2~4年(p14) ことば6年(p13)	中学ことば(p14) 英語論文(p17) ギリシャ語初級講読 C(p23)	中学・高校英語(p14) ギリシャ語初級講読A(p23) 調査研究入門(p19)
水	英語講読(ハリーポッター) (p17) (10:00~11:20)	ことば1~3年(p13) 山の学校ゼミ(社会) (16:00~17:20)	かず1~2年B(p16) ことば5年(p13) かず5年(p15) (17:45~18:45)		中学数学1~2年(p16) 中学数学3年(p16) 歴史入門(高校)(p14) ラテン語初級講読 A(p22)
木	ラテン語初級講読 B(p22) (14:10~15:30)	しぜん B(p10) かいが B(p11) (15:50~17:20 隔週)	ひねもす道場(イベント) (月1回 16:00~18:00) ウェブプログラミング入門 (17:10~18:30 隔週)	中学英語1~2年(p17)	中学・高校数学(p16)
金	ロシア語講読(p21) (14:30~15:50)	ことば4年A(p13) ことば4年B(p13)	かず4年 A(p15) かず4年 B(p15)	中学理科(p18) ギリシャ語中級講読(p23)	ロボット工作(隔週)(p18) ユークリッド幾何(隔週)(p16) ラテン語初級講読 C(p22) ラテン語中級講読(p23)
土日	フランス語講読(p21) (日 9:10~12:00 隔週) 論語の素読・勉強会 (イベント)(p25) (月1回 9:00~11:00)	ギリシャ語初級講読 B(p23) (第2・4土 14:00~17:00 隔週) ラテン語初級講読 D(p22) (日 14:00~15:20)			

エッセイ 山の学校 10周年に寄せて

～『山の学校創設 10年をふりかえって』～

山下育子

今から 10 年前の 1 月を振り返ると、懐かしい気持ちになります。当時、私は 4 月から引き継ぐことになった幼稚園と、新たに始める山の学校のことで、始終太郎先生と計画を練る日々を過ごしておりました。幼稚園に関しては、先代山下一郎先生と牧子先生のもとで 10 年あまりお仕事をご一緒させていただき多くを学んだと思える頃でしたが、一方の山の学校という、まだ名前も決まらず、ただ太郎先生から、新しい学びの場をスタートしたいというアイデアを聞く一方でした。幼稚園の保護者の方々にご心配やご不安を与えることなく、二つの仕事を無理なく形あるものに結びつけなければならない。私はこのことを肝に銘じながら太郎先生と話を交わす中、1 月の末には「山の学校」の名称も決まり、募集要項といえるものもできあがりしました。



これがそのときのパンフレットです。表紙の絵は京都工芸繊維大学の中野仁人先生に描いていただきました。開講クラス名を見てみましょう。小学校の部として、『ことば』『しぜん』『かず』、中学校の部として、『英語の基本』『英語の読み書き』『数の基本』『数の世界』『日本語の読み書き』、高校・一般の部として、『英語の読み書き』『数と自然』『日本語の読み書き』『ラテン語入門』という名前が並びます。

『ことば』の低学年は山下一郎先生、高学年は福西亮馬先生（4 月から幼稚園の事務として着任）、『英語』と『ラテン語』は太郎先生、そして『しぜん』は私が担当する…。こうして、たった 4 名のスタッフで船出したのが山の学校の始まりです。

年間スケジュールは、幼稚園の仕事と両立可能な三学期制に設定しました。当時 4000 人にのぼる卒園児のうち約 300 のご家庭に出来たばかりのパンフレットを発送したとき、もう後に引けない気持ちになりました。

ここで「山の学校」の名前の由来について書いてみたいと思います。4 月からの「太郎塾（一郎先生が提案された当初の案）」開校に向けて準備していた 1 月のある日、私は、京都丹波の自然と子ども達を描いた『森の学校』という映画を観ました。川やたんぼで泥だらけになりながら遊んで成長する子どもたち。そうした遊びの中から自然の美しさや命の尊さを心に刻みたくましく成長していく男の子。そう、河合雅雄先生（京都大学名誉教授）を主人公とした作品でした。

翻って幼稚園の日常を思い返してみても、子ども達はいつも好奇心の塊で、自然と戯れるとき目はキラキラ輝いています。そんな子ども達にとって自然は生きた教科書であり、夢や希望、死と惜別までを教えてくれる大きな存在です。知識は机の上で学べますが知恵は部屋の中では得られない、ゲームでは命の尊さも判らない…。おぼろげながら抱いていた私自身の考えを見つめ直すきっかけになった作品、それが『森の学校』でした。

映画を見た帰り路、元気いっぱいのおてんばで、山中（瓜生山）を走り回って過ごした自分の幼児期や小学生時代の幸福感がありありと甦ってきて止まりませんでした。そんな気持ちのまま、自宅のある山のふもとに戻って来たとき、小学生用の自転車二台、石段の下に置いてあるのに気づきました。と、そのとき、元気な男の子二人が声高らかに山道を駆け下りて来たのです。まるでさっき見た映画のワンシーンのようでした。礼儀正しく挨拶して去って行ったのは、卒園した子どもたちでした。

これだ！ 私は彼らの後ろ姿を見送りながらひらめきました。こうした子ども達とこの北白川山の自然の中で

共に活動し、学びの時間を共有できればどんなに楽しいだろう！帰宅してさっそく太郎先生にこの考えを話したところ、新しい学校の名称は、『森の学校』ならぬ『山の学校』にしよう、とすんなり決まりました（太郎先生は、自分の名前を学校につけるのは窮屈だと言っていたのですが、この名称には大賛成でした）。

幼稚園の新年度が走り出した4月、山の学校もいよいよスタートです。以来6年間、私は『しぜん』クラスの担当として、想像していた以上に充実した取り組みを子どもたちと共有することが出来ました。振り返ると、言葉に尽くせないたくさんの思い出の詰まった日々でした。

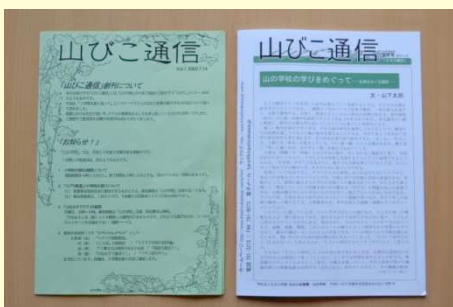
手始めに、子どもたちが日頃の自然観察を書き留める「しぜん日記」ファイルを用意しました。クラスの始まりに相互の発表に耳を澄ますのは至福のひとつ。一人一人の絵入りの日記には毎回感想を加えてお返ししました。春のお山の“竹の子掘り”や、よもぎを摘んでの“よもぎ団子づくり”。野菜を植えて収穫したり、いちご栽培をしてから“いちごジャムづくり”など。大文字山、御所、植物園、京大理学部植物園には何度足を延ばしたか知りません。子ども達と山中をくまなく探検したり、歓声を上げて崖すべりを体験したり。森を護るフォレストアズとして、落ち葉の掃除や古木の伐採、薪づくりなどの諸活動、園庭つづきの森を「ひみつの森」と名付け、基地づくりに精を出したことも忘れがたい思い出です。

山の学校全体のイベントもいろいろ企画しました。夏休みには「ワクワクしぜん教室！」と題して、幼稚園園庭～瓜生山山頂経由～狸谷不動尊までを親子で散策したり、比叡平から大文字山三角点を目指したこともありました。山中に『しぜんクラス』で作った木製の記念プレートを全員で掲げたことも懐かしい一コマです。

幼稚園の卒園児であるアリ博士の山岡亮平先生から子ども達に生きたアリの生態について教えていただいたり、松本紀生さん（アラスカの自然写真家）をお呼びしてフィルムシアターを観たことも…。いつも新企画を考えながら、ワクワクしながら手探りで駆け抜けてきた6年間の日々が走馬燈のように思い出されます。

2008年1月。太郎先生が過労で入院。退院後、太郎先生が担当していたクラスはすべて志のある若い先生方に引き継いでもらい、今に至ります。私も、その翌年度から、『しぜん』クラスを若い世代の先生方に託すことに決めました。こうしてクラスの担当から離れて早4年。年々、志を同じくする若い先生方が集まって下さり、今では15名ほどの先生が各科目の授業をして下さっています。

クラス便りは、学期毎に発行する山びこ通信にまとめてお伝えしてきましたが、下の写真にありますように、2003年（7月第1号発行）～2012年（2月号）までの約7年間の山びこ通信は、園内の印刷機を使い、手折り作業で作ったものでした（写真下左）。2010年6月号より印刷会社に業務を依頼することになり、以来、色刷りの通信誌として、全国の関係者のお手元に発送させていただいています（写真下右）。



現会員の大勢が学んでいる山の学校の建物は、寺子屋風の木造建物（母屋）ですが、2003年の開校当初は、大変老朽化した家屋に過ぎず、せいぜい玄関入り口の六畳ほどの畳の間だけが使用可能なスペースでした（暖房器具や空調設備、電話も何もない状態でした）。その向こうは「開かずの間」ならぬ「開けてはならぬ間」があり、さながらお化け屋敷（？）の趣さえありました。目隠しに明るいカーテンを吊したり、いろいろ苦心したことも今となっては懐かしい思い出です。会員が大きく増えた2005年の春、一ヶ月をかけてようやく現在の建物の姿に改築した次第です。入り口カウンターを設置し電話回線を敷き、その奥に新しく3つの教室をつくりました。また、一般クラスの会員増に対応するため、2010年春には「母屋」の向かい側に大人用の「離れ」の部屋を用意しました。この部屋からの眺望は抜群で、目の前に京都市街、遠方には西山も望める落ち着いた雰囲気空間です。大人の方々の学びの場として相応しく、今では多くの会員にご利用いただいています。

4月からいよいよ11年目を迎える山の学校です。小学生から一般までの会員が、生涯学びの喜びを共有できる、多くの可能性を秘めた学舎であり続けたい、と願っています。



～『山の学校 10 周年によせて』～

ゆたか
前川 裕

山の学校が 10 年続いてきたことに、まずは驚きと喜びを申し上げます。それだけの長い間、学びを求めて長い坂を上り続けた方々がいらっしゃったからこそ、これだけ続いたのでしょう。その意味で、まず受講していただいた方々、またこの事業をご理解いただき、子どもたちを送り出していただいた保護者の方々に感謝を申し上げます。

山の学校の特色は、幅広い年齢層に対して本格的な教育を行っていることでしょうか。世にカルチャーセンターはたくさんあります。楽しみのための学びの場は、もっと容易に見つかるでしょう。山の学校は、そもそも左京区の山の上にあります。そこまで到達するには時間も距離もあり、そして最後には自分の足で山を上らねばなりません。それは知というものに求められる姿勢を表しています。知は身近とは限らず、時には遠くまで探しにいかねばなりません。そしてさまざまな教材があり教師がいるにせよ、最後には自分の力で学ばねばなりません。山の学校は、まさに「体で」学びの意味を感じ取る場なのです。

私は、山下太郎先生の招きにより山の学校の初期から携わらせていただきました。ラテン語の文法および講読、また古文講読を担当しました。受講者は大学生から歳を重ねた方々まで、さまざまな方がいらっしゃいます。しかし知を求める姿勢はみな変わりません。皆さんの学びへの熱意に講師もまた学ばされる場、それが山の学校です。その意味で、山の学校は講師と受講生とがともに作りあげていく場であるといえるでしょう。

私事ですが、この春にて大学に働き場を移すため、山の学校の講師はいったん終了させていただきます。しかし、またいつでも戻ってきたいところ—それが山の学校です。この希有な学びの場が続いていくことを祈念申し上げます。



～『山坂達者と山の学校』～

山下大吾

私の故郷鹿児島に「山坂達者」という言葉がある。その意味は自ら明らかであろうが、「山道を歩いて健康になる」といったところであろうか。「山道を歩けば」、「歩いてこそ」が正しいかもしれない。

要は鹿児島に限らず、交通機関の発達していなかった一昔前の日本であれば、標語以前の当たり前の行為であり、結果であろう。しかしながら鹿児島ではさらに特別な意味が込められており、薩摩藩特有の「郷中教育」に端を発する言葉で、今日でも特に青少年の教育向上のスローガンとして用いられることが多いようである。

言葉を取り上げた当人が他人行儀な物言いになるのは何とも歯切れが悪いが、そもそも第二次ベビーブームに生を受けた者が郷中教育の恩恵を被ったなどと言えるはずがない。私自身としてはそのような大仰な意味合いではなく、単に冒頭に紹介したような意味が自然に好ましいものとして今まで意識されてきたに過ぎない。鹿児島といえば桜島だが、それだけでなく元々山がちで平地は少なく至る所痩せたシラス台地ばかり、それならばどこへ行くにも歩いて登るしかない、歩けば自然と体が鍛えられる。そのような風土をむしろ好条件と捉えた発想が素晴らしい。体だけではない、ギリシア人も学園の周囲を逍遙して哲学

を行い、漱石も山路を登りながらあのよう考えたではないか。

山の学校へと通じるお山の階段を登るたびに感じるのがこの山坂達者である。ここでは老いも若きも同じ道のりをそれぞれの仕方でも登り降りしている。その途中、山の学校の関係者以外の方々からも、つまり初めてお会いする方も含めて一様に挨拶の言葉を頂戴する。お山では何気ない日常の光景なのかもしれないが、東京京都と街中で孤独な一人暮らしにいつの間にか馴染んでしまった身にとって、挨拶を交わすという当たり前の行為が貴重な経験に思えてくる。小学校の登下校時、片道2キロ弱の山道を通いながら同じような行為を毎日繰り返していたはずの自らの幼い姿が懐かしくも一つの鑑として思い起こされ、深く恥じ入らせてしまう。

山の上ではそれぞれの真摯な学びが日々展開されている。郷中教育をヒントに、小中学生を中心とした勉強会を定期的で開催するつもりだと山下先生から伺った際には、少しく驚きつつも心中快哉の声を挙げていた。ここでは石段を一步一步確かめながら登るように、基礎を確認した上で先に進む。立ち止まって考え、歩みが遅くなる経験を失敗あるいは損失と捉える必要は全くない。焦らずとも道は先に続いているのであり、むしろその道のりを異なった調子で歩むという楽しみが得られたことに満足すべきだろう。私自身、受講生の方々からこのような実りある教を幾度も受け、大変有難く感謝している。

学びの山坂達者、それが山の学校であると考えている。



～ 『山の学校での実践を振り返って』 ～

浅野直樹

今回、この原稿を書くにあたり、自分がいつから山の学校に来ていたのか調べてみました。そうすると2006年の4月からだったので、もうすぐ丸7年ということになります。当時小学校の低学年だった生徒がこの春からは高校生になるのですから、年月の流れを感じさせられます。

7年間に渡って山の学校の中に入っていたのですから、思い出話をするだけでも山の学校の雰囲気は伝えられることでしょう。

他ではあり得ないようなクラスを実現できたことがまず思い出されます。1つには「英語講読（ハリー・ポッター）」です。読書会として、有志といっしょに第1巻を1冊丁寧に読んだことは大きな自信になりましたし、自らの英語力も向上しました。この冬学期からは受講生に恵まれ、第2巻を楽しく読み進めています。もう1つには「調査研究入門」です。自分の興味のあることを調べ、まとめて発表するというのは学問の根本だと思います。大学ではそうした学問をするのが難しくなってきたと言われているだけに、そのような場を持つことができたのは意義深いです。

クラスにはなっていない企画もいろいろありました。小学生の「勉強会」、中学生以上の「何でも勉強相談会」はその設立から関わってきたので、思い入れもひとしおです。どちらの会でも学年を超えて教え合う姿が頻繁に見られました。そうしていろいろな人の姿を見て、話をすると、自分なりの学習方法を形成する助けになります。これは何も教えられる側に限ったことではありません。人に教えることで自らの理解が深まるという経験はおそらく誰にでもあることでしょう。自分の生き方を再確認するという意味で、「青春ライブ授業」にも同じことが言えます。

他の先生方のクラスに入らせてもらったこともありました。大人になり、特にこういう仕事をしていると、何かを教わるという機会はなかなかありません。「ラテン語初級文法」を受講していたときは本当に新

鮮な気分でした。食わず嫌いだった状態から、一通りやったという手ごたえが得られる状態まで導いていただけただけなことには今でも感謝しております。「ウェブプログラミング入門」でも、独学で感じていた壁をおかげさまで乗り越えることができました。どのような問題に突き当たってもそれを軽々と解決する先生の姿は非常に頼もしかったです。

そして何よりも日々のクラス 1 回 1 回が貴重な思い出です。山の学校は少人数制なので、一人一人のことを今でもはっきり思い出せます。個性はそれぞれですが、生き生きと学んでいることでは小学生から大人まで同じです。入試に合格したという知らせを聞いたこともあれば、失敗したという知らせを聞いたこともあります。どちらにしても山の学校で学んだという事実は消えませんし、自分の頭で習得したことも残ります。

10 年、20 年、さらには 100 年、200 年先にもつながるような実践が山の学校でできるように、これからも目の前の一つ一つの瞬間を大切にしていきたいです。



～ 『大人になっても学び続けるために』 ～

ばく
百木 漠

私は 3 年ほど前から山の学校にお世話になり、これまで小学生の「かず」のクラス、高校英語のクラス、経済学入門の授業、将棋道場などを担当させていただきました。現在は将棋道場の道場主のみを毎月一回担当させていただいています。

それぞれのクラスや企画に思い出や思い出入れはあるのですが、とくに山の学校ならではのユニークさを体験させていただいたのは「経済学入門」の授業です。毎週、40～60 代の方を相手に経済についての授業をする、というよりは一緒に議論をし、共に学ぶ、という楽しさ・面白さを味わわせていただきました。経済学入門といっても、マクロ経済学やミクロ経済学のような理論を教科書的に学ぶことはほとんどしていません。毎週、私が気になった経済ニュースの新聞記事などを切り抜いてコピーしていき、それについて簡単な解説を加えながら、その感想を皆で議論しあう、といったことをしていました。また、一冊読む本を決めて、毎週一章ずつそれを輪読していく、という試みもやりました。ときには私の研究内容を簡単に報告して、それをきっかけに議論をしたこともありました。いずれの内容も意外な方向に議論が転がり、私が一方的に「教える」というよりも、むしろ受講者の方々から「教わる」機会が多かったように思います。

私事になりますが、私は大学周辺の仲間と一緒に「京都アカデメイア」という勉強サークルのようなものを主催しており、山の学校でも「経済学の夕べ」や「調査研究の夕べ」、「アカデメイアカフェ」などのイベントを、場所をお借りしてやらせていただきました。そのときにも感じたことですが、山の学校の良いところは、学生も大人も一緒になって学びあうことができるということです（もちろん他にもたくさん良いところはあるのですが、ここでひとつだけ挙げるとすれば）。その意味で、山の学校は京都アカデメイアにとっても良き目標のひとつであり同志である、と勝手に考えさせてもらっています。

生涯学習の大切さ、教養を学ぶことの大切さなどは昔から言われていることだと思いますが、では学校（小中高大）以外の場所で、独学以外でそういうことをできる場所が今の日本にどれだけあるのでしょうか。もちろん山の学校でもうまくいっていることもあればそうでないところもあると思いますが、それでも大人のクラスから中高生、小学生のクラスまで幅広い種類のクラスがあり、さらには幼稚園まで一緒に

あるという、こんな「学校」はなかなか他にありません。大人がラテン語やイタリア語を学ぶ横で、小学生が工作や絵画や将棋をやっていたり、中高生が英語や数学を学んでいたりする。調査入門やユークリッド数学、なんでも勉強会などユニークなクラス・企画も多い。

そういった良い意味での「雑多さ」や「多様さ」が存在している山の学校という場所は、学問の面白さを多くの人たちと分かち合いたい、歳をとっても一生学び続けていきたい、と考えている私のような人間にとっては希望のひとつでもあります。山の学校のような「学び」の場所が他にもどんどん増えていけばいいのにな、と思ったりもしています。縁あって、このような素敵な「学校」の一端に関わらせていただいているのは非常にありがたいことです。微力ながら今後も山の学校を盛りたてるお手伝いをしていただくと考えておりますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。



～ 『「かいが」クラスに寄せる想い』～

けんてつ
梁川健哲

最近、クラスをしていて少し気がかりなことがあった。

ある生徒が、絵を描く手を休め、時々周囲を見回しながら、画用紙とにらめっこを続けている。そっと近づいていき、「どう？」と声をかけると、「間違っていない？ここに、こういうのを描いてもいい？」と私に問いかけてくる。「勿論！ いいよ。こうしてみよう！と思った通りに、描いてみればいいんだよ。何も間違っただんかいないよ。」そう答えると、「あのね…」と言って、はにかむような仕草をしながら語ってくれた。

その子によれば、小学校の図画の時間、先生に「ちゃんと描きなさい」とか、「間違ってる」というような事を言われたのだそうだ。お友達にも、描いたものが、「それらしく見えない」というような指摘をされたという。本人は、苦笑いをしながら語ってくれたが、かなり傷ついたに違いない。他にも、絵を「訂正された」といった、似たような内容の告白をしてくれた生徒が何人か居た。

私の知る限り、その生徒たちは、例外なく、とても深刺としており、ゆたかに空想を膨らませる力を持っている。描かれたものは、見る者に思わず笑みを溢れさせるような温かみを持ち、ぐっと胸をつかまれるような作品を、共担の彬先生と一緒に何度も目にしてきた。

だから、このような生徒からの訴えは、大変ショッキングであった。「これは、ただ事ではない」と思った。

私は、小学校の図画教育を真っ向から否定しようなどと思わない。その恩恵を受けてきた一人であるし、小学校時代（～高校時代までも含めて）体験した課題制作の全てが楽しかった。今でも何をしたか、全てを列挙できる。ただし、私は、決して自慢のつもりで言うのではないが、所謂「絵がウマイ」とか「絵がトクイ」と言われる生徒だった。このことは、私の自信になったし、誇りでもあった。

しかし、その一方で、「絵は苦手」「自分は全然描けないから」といって、さじを投げてしまっている友達が、何人も居たことも覚えている。「どうしてだろう？こんなに楽しいのに。」そして同時に、ちょっとした優越感も覚えた。

今になって、よくよく分かる。そうした優越感とは、至ってつまらない、ちっぽけなものであったこと。（そして、それを抱き続けたままもし大人になっていたとしたら、それは不幸であったこと。間違った「誇り」のままであったこと。）また、私が当時あまり注意して見なかった「友達の絵」の中に、無数の素晴らしい絵があったかもしれない、ということ…。

大人は、何気なしに「ウマイ」「ジョウズ」と子供の絵を褒めがちだが、ここには落とし穴も潜んでいることを、強調したい。端的に言えば、絵についての「ウマイ（へタ）」とは、無数にある絵のあらわし方（見方）に

おける、視点の1つに過ぎない。つまり絵には、絶対的な基準というものが、存在しないのであるから、「合っている」「間違っている」も起こりえない。(間違えた、という言葉は、その絵の作者本人にのみ許された言葉である。)

「課題制作」というとき、それは、一定のテーマや物理的条件、狙いを元に、「何かを体験させる」事なのであって、一定の成果(見栄えのする作品)に導くようなものであってはならない(特に子供時代は、と思う。)

今一度、「絵を描く」とは、何であるかを問うてみる。私が考えるに、絵とは「目的」ではなく、どこまでも「手段」に過ぎない。何の手段かは、人による。つまり、大切なのは、プロセスそれ自体である。テーマをどう解釈し、条件の制約をどう乗り越えるのか、という「方法」を、各々が工夫を重ね、失敗も味わってこそ、本当に意味があると思う。山の学校「かいが」クラスにおいては、この点に重きを置いている。

強く、何かを思い描くこと、そして、あらわそうと、諦めずに工夫を重ねること。「かいが」クラスで、子ども達に伝えたいことである。それには、必ず何か意味があり、どこかで山の学校の理念とも通じていると信じている。そしてまた、自らが絵を生涯とし、描き続けるという「プロセス」を体現し続けたいと思う。



～『これからの10年に向けて』～

あきら
高木 彬

私は、山の学校でお世話になりはじめてから、この3月でまる5年になります。担当させていただいてきたのは、おもに小学生のクラスです。5年のあいだには、いろいろと思い出深いことがありました。これまで教室で一緒になった子供たちの名前や、表情や、言葉や、そのときの光の加減なんかも、ぜんぶ覚えています。でも、書き始めると、あれを書けばそれも、それを書けばこれも、というふうに取り留めもなく溢れてしまいそうなので、ごめんなさい。今は、胸にしまっておかせてください。もしかしたら、山の学校の20周年記念のエッセイには、落ち着いて書けるのかもしれない。

ですので、私からは、これからの未来のことを、ひとつだけ。

授業で取り上げる題材や方法そのものの面白さに頼って、それを次々と消費しながら進んでいくよりも、ひとつひとつの題材にじっくりと(それこそ年単位で!)向きあう。上手く言えないのですが、そんなクラスづくりを、これから先も、心がけていきたいです。題材の面白さに頼れば、やがて飽きて面白くなくなる日が来ます。テレビゲームは、クリアすれば次のソフトが欲しくなります。それもたまにはいいでしょう。しかし、じっくりと自分の頭でものを考えること自体に面白さを見出すことができれば、それは一生の力になります。大げさなことを言うようですが、教育の本来の意味のひとつは、そこにあるのではないのでしょうか。これまでの短い経験から、実感していることです。

こうしたことを実践できる稀有な現場として山の学校があり、山の学校を支えてくださる多くの会員のみなさまがおられて、そこになにかのめぐりあわせで関わらせていただいているのは、私にとって、言葉の正確な意味で「有り難い」ことです。子供たちの10年後のために、明日からも、どうぞよろしく願います。





「しぜん」A・B

けんてつ 担当 梁川健哲 高木彬

いきものたちが影を潜め、しんと、冷えた森の空気。実は、こんな季節にこそ、フィールドワークが似合います。「ふ～、暑いよ～！」石段を駆け上がって教室にたどり着く、こどもたちの第一声。かっかんと燃える、しぜんクラスの仲間たちの、冬の活動をご覧ください。



● いきものたちは何処に

A(火曜)クラスでは秋学期、出会った虫を中心に、観察・記録する「いきもの図鑑」の構想が生まれましたが、季節は既に、虫たちを見かけなくなる時期に入っていました。しかし、森を散策の最中、積もった木の葉の下に、すばしこく隠れる甲虫の姿を、希に目撃することがあったので、「昆虫トラップ」をしかけてみては、という流れになりました。各自が虫たちの動線を想像しながら、幾度かの試行錯誤を経て、地面に埋める「落とし穴型」のトラップを考案しました。



次のクラスの日、みんなとトラップを回収しに行くと、ぼこぼこ凹みや傷跡のついています。よく見ると、それらは爪痕や、牙の跡、おそらく狸かイタチか何かのものです。虫を呼ぶはずだったトラップは、思いがけず、森に暮らす動物を呼び寄せ、また、僅かに残っていた餌にも、マイマイカブリや、ゴミムシの仲間などが集まり、普段、姿を見せない生き物たちの、懸命に生きようとする息づかいを感じる結果となりました。噛み跡のついた紙コップ。「これ、記念にとっておきたいな～！」というT君の言葉が印象的でした。

↑トラップの制作

←拾った朽木も調査！



←集まった虫たち。センチコガネを可愛い！と言って帽子に入れたMちゃん。

● 発表の時間

毎クラスの開始時には、家で作った作品や、石段でみつけた木の葉や木の実などをもち寄って発表しあいます。見たり、触ったり、嗅いだりして、大盛り上がり！

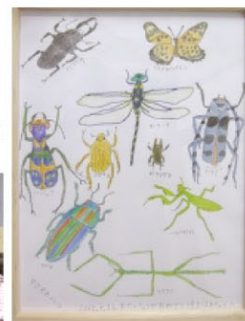


いきもの博士T君恒例の発表。彼が飼っているクワガタの幼虫をみんなで観察。



◀切り紙で作ったY君の虫たち。

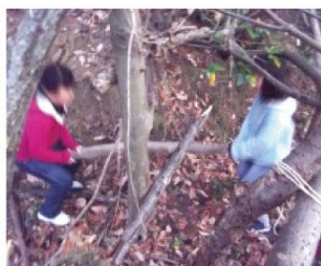
▼いつもきれいな葉っぱや木の実を拾ってくるRちゃんとYちゃんが眺めるのは、H君の飼育しているドンコ。



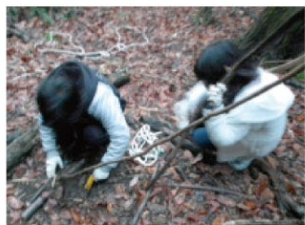
▲いきもの大好きH君の、虫の細密画。

● ひみつ基地

一足先に、森の中の「家づくり」を始めたBクラス。森に自生している何本かの木を支柱にして、辺りに落ちている枝を次々と立てかけていきます。すると、みるみるうちに、壁らしき姿、屋根らしき姿、今までそこに無かった空間が立ち現れてきます。そうすると益々面白くなって、材料を次々と集め始めます。この変化の面白さと、「人が中に入れる程の大きな構造物を築いた！」という喜びが、「ひみつ基地づくり」(Bクラスでは「家づくり」と呼んでいました)の醍醐味です。一方、Aクラスのみんなが選んだ場所は、Bクラスの家隣の、少し開けた場所です。支柱のないところに、うまく基地を作れるでしょうか。



RちゃんとYちゃんが森の家に行くとき毎回必ず遊ぶのは、自分たちで作ったシーソーです。現在、ブランコも作成中です。



Bクラスでは、試行錯誤と少しのヒントから、枝で骨組みまでを立ち上げることに成功。1年生のS君は、自ら「材料集め係」を名乗り出て、やる気満々です。自分の力でこんなに大きな枝をたくさん運べるぞ！というのが、彼の誇りのようです。でも、自分では運びきれない丸太に出会ったときは、素直に仲間たちの応援を受け入れ、清々しい表情をしていました。

森の家を拠点にしながら、Y君は次にするたき火のための薪を集めています。

(文責 梁川 健哲、高木 彬)



「かいが」 A・B

担当 梁川健哲^{けんてつ} 高木彬

● 外で描く

秋学期の後半は、屋外で絵を描きました。例年、屋外には春学期に行くことが多いのですが、木の葉が色づく晩秋の空もまた格別です。石段を降りて、少し行ったところにある公園。そこで空気を大きく吸って、各自がモチーフを見つけるところから、絵画は始まります。今回のポイントはただひとつ。外「で」描く。これだけです。ですから、外「を」描く、すなわち見えるものそのままを写生する必要もありません。見えるもの、見えないもの、見たいもの。聴こえるもの、思いだすもの、想像するもの。すべてがモチーフです。その成果を、どうぞご覧ください。



同じ木を描く二人。心で木を抱きしめるSちゃん。質感に迫るMちゃん。

じっと風景と向き合い、それを再構築したH君。

大きなアクションで小さなドングリを捉えるY君。



TちゃんやI yちゃんの小人は、夕焼けや紅葉が誘い出したのでしょうか。



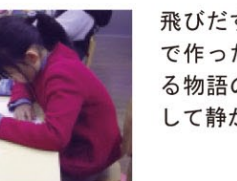
I oちゃんは並んだ木から、Hちゃんは夕陽に佇む木から、物語を紡ぎます。

T君の描く木の幹には、夕焼けを浴びたような温度が感じられます。



● お話の絵

冬学期に入ってから、絵本を作っています。物語との最初の出会いは、おそらく口伝の昔話や童話ですが、最初の一冊となれば、たぶん絵本。何度も何度も読み返した「自分の一冊」が、誰しもあるのではないのでしょうか。そうした一冊を、今度は作ることができれば、それは素敵なことです。まずは物語を考えて全ページの構成(絵コンテ)を整理し、それから1ページごとに絵と文をかいていきます。本の綴じ方はどうするか、外形はどうするか、ページ数はどうするか、どの画材で描くか、絵と文の配置バランスはどうするか、なども自分で考えます。極端な話、文のない絵だけの絵本があってもいいし、その1枚の絵に物語性が感じられれば1ページだけの絵本があってもいい。「お話の絵」というやや抽象的なタイトルには、そういう広がりを探求への期待も込めています。みなさんがこの記事をご覧になる頃には、思い思いの作品が完成していることでしょうか。みなさんにお目にかかれる日が楽しみです。ここではその制作風景の一部をご覧ください。



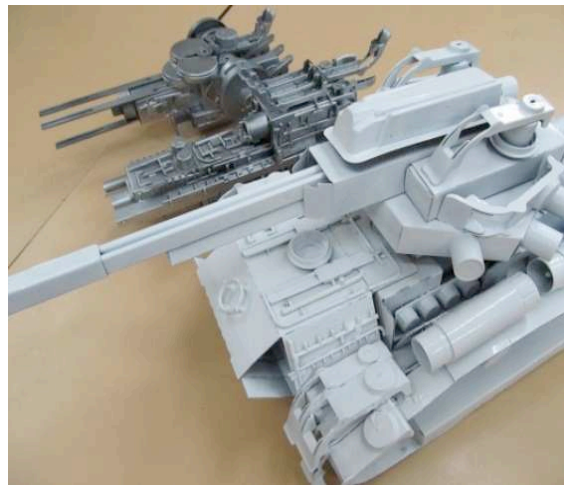
飛び出すしかけ作りに夢中になる人もいれば、ことばクラスで作った物語を絵本にする人もいます。それぞれが自分の作る物語の世界に入りこんでいるからでしょうか。いつにもまして静かな時が流れています。

(文責 梁川健哲 高木彬)



振り返れば、この「つくる」クラスができてから2年が経ちます。このクラスを作った最初の思いは、『ゲームより面白い!』と言えるようなクラスを作りたいということでした。

「今どき工作教室なんてありふれているだろうし、見向きもされないだろうな…」という当初の心配はよそに、お陰様で「さもありなん!」と言えるような、素敵な生徒たちが集まってくれました。彼らこそ、私にとっても、かつての自分がどのような子供であったのかを教えてくれる「父」であり先生です。そうした昔も今も変わらない彼らの純真さに寄り添えるようなクラスを「作りたい」というのが、今の私のチャレンジです。



さて、山の学校は10年目を迎えましたが、さかのぼって4年前の山びこ通信を思い出すと、巻頭文の題名は「新たなる挑戦」でした。そこで私も「生徒だけでなく先生も新しいことにチャレンジする」ことを抱負に、「ロボット工作」や「ユークリッド幾何」といったクラスを新しく始めたのでした。しかし、それでもまだチャレンジしていないクラスが実はありました。それが今の「つくる」なのです。

私がこのクラスで生徒たちと向き合う時、大事にしていることがあります。それは、「自分が子供の時に何をして何を栄養にしながら、ここまで来たのだろうか?」という、自身への問いかけです。私にとっては、どうやら写真にあるような、からし箱やダンボール箱が自分の核心になっているようです。それは一見、「実のないもの」のようですが、その時の主体的な「工夫のあれこれ」が、勉強に限らず何をする時にでも支えであり、自信の源だったことを思い返します。また、家では私がそれをしているような時には、幸いにも親は何も言わずに黙って見守ってくれたことが大きく、そうした自分と向き合えた時間が、今の私をかたち作ってきたのだらうと思います。そのような「もう一人の自分」を「この時」から大事にし続けることを、これからもクラスでは実践していきたいです。

クラスを立ち上げた当初は、「からし箱がどのように変身するか、乞うご期待下さい」という未来形でしか語れませんでした。今では、「この満面の笑顔を! 語りたくて仕方がないこの表情を、どうぞ見てあげて下さい」と言えるようなクラスになっています。言うまでもなく私にとってもまぎれもない「宝物」のクラスです。もちろん、そうした宝物の時間を独り占めするつもりはありません。「我も」と思う人はぜひ一緒に分かち合ひましょう。

「ゲーム」も楽しいですが、むしろ「つくる」には、それとは比べられない面白さが見つかるはずですよ。



(福西亮馬)

その後、現在6年生クラスのHちゃんが5年生のときに書いた本『星の王子さま』は、山の学校の本棚に収めることに。それまでカウンターに置いて閲覧できるようにしていたのを、頃合いをみて、Hちゃんの許可をもらって、本棚の並びにそっと忍びこませておいたのです。それを真っ先に見つけたのは、4年生AクラスのT君。「あ！あれって、カウンターにあったやつや！」手にとって「これって書くのにどのくらいかかけはったん？」と、興味津々の様子。それまでカウンターに平置きしていたときは、また違う感じ方があったのかもしれませんが。（本棚に並ぶことで、本はより本らしくなるのでしょうか。）Hちゃんは丸1年かけてこれだけ分厚い本を書いたのだと答えると、T君は言いました。「すごい！ぼくも長いお話を書きたい！」こうしてお話を書きはじめたこのクラス。Sちゃんはミステリー小説を読むのが好きだそうで、いま書いているのも推理探偵小説です。創作に並行して秋学期から読んでいる『怪人二〇面相』は、その滋養として最良の部類に入ります。一方、最初はなかなか筆が進まなかったR君。そこで、「お話を書くのに、早さは全く関係ない。ゆっくりでいいから、自分の納得の行くお話を書く姿勢が尊い」と伝え、待ちました。今では、「こんなに長く文章書いたの、初めて！」と言いながら、お話づくりを自信の柱にしてくれています。

継続は力なり、という言葉が肌で感じるのは、1～3年生クラスでも同じです。最初はほんの数回のつもりで始めた俳句カルタづくりは、いつしか定番に。1年生を中心とした好奇心旺盛な彼らも、じっくり腰をすえて一つのことに取り組む姿勢を学んでくれたようです。しかも、その一つのことには、書く、読む、発表する、遊ぶ、全ての要素が入っていたのです。右の写真は、自作の俳句カルタで大会を催しているところ。ずいぶん読んだ後で撮ったので、本当はこの2倍近くの札があります。読み手であるHちゃんをのぞけば、誰も正座を崩していないことにご注目ください。



『星の王子さま』に話を戻すと、5年生クラスのY君が、夏休みの間に読んだそのHちゃんの本に本棚で再会し、手にとって「やっぱりすごいよなあ」ともらす場面もありました。しかし実は、Y君のリレー小説も、クラスで書きはじめてそろそろ丸1年になります。なぜ「リレー」なのか。それは、昨年度の『ことば4年生版「フューチャー・イズ・ワイルド」』以来の伝統で、クラス全体で一つの世界観を共有するためです。みんなで一つのお話を書き継ぎながら、自分の番で周りを「アッ」と言わせる、連歌にも似た愉しみ。同クラスのKちゃんは、そこでは夜空に輝く北極星のように、物語の航路を先導しています。創作の栄養にと読みはじめた『マルコヴァルドさんの四季』はもうゴール目前ですが、彼らのリレーはまだ続きます。

こうした他のクラスでの反響を伝えると、6年生クラスのHちゃんは、少し恥ずかしそうにしながらも、まんざらでもない様子でした。しかし現在の彼女は、もはや『星の王子さま』に満足していないと言います。偉大な作家は、けっして過去の作品に安住しないもの。今年度も、1年がかりの大作を完成しつつあります。

（高木 彬）

『ことば』（4年生B）

担当 福西亮馬

冬学期から、百人一首に取り組んでいます。中学生のお兄さんを持つIちゃんには、お兄さんが学校で覚えるために使っていたプリントが、いわば「虎の巻」です。それをいつもノートに挟んで得意そうに持ってきてくれています。またMちゃんは、祖父母の方ともかるたをする機会が多いのか、聞き覚えのある歌については、「それ知ってる！」と、上の句もすらすらと読み上げてくれます。どちらの生徒も、覚えている歌を披露してくれる時の様子は自信にあふれています。

大事なことは、和歌を覚えることは単純な暗記作業ではなくて、自分なりの物語を付けることだと思います。それは、Iちゃんにとっては、季節や夜空に関係のある言葉であったり、覚えてたの札を取れた時の嬉しさであったりします。またMちゃんにとっては、紫式部や蝉丸といった有名な歌人について、いつかお家の方としたやり取りが、記憶の引き出しとなっているようです。「この歌は、おじいさんおばあさん（お父さんお母さん）の好きな歌」と言うだけで、子供たちには興味が湧くようです。私自身もそのような思い出があります。私の場合は、母の田舎が天橋立の近くだという理由で、母からは「大江山」の歌が好きだと聞かされました。それも、お正月に百人一首をする時はいつも決まってそれだけを言うので、いつの間にか

その歌が私にも身近になっていったことを覚えています。そのように歌に付いた「物語」を、今でも「快い」と感じます。それはあまりに素朴な、一本の垂れ糸のようではありますが、むしろ切れないことに意味があります。山の学校のクラスではそうした糸を（そこに何本の横糸を通すのかは各自の意匠に任せるとして）見守りたいと思います。

本読みでは、ジャンニ・ロダーリの『青矢号』（岩波少年文庫）を読んでいます。あらすじは、「ベファナーの店」の物言うおもちゃたちが、貧しさゆえにエピファニー（イタリアでいうクリスマス）のプレゼントをもらえない少年に同情して、夜中にショーウィンドウから抜け出します。一方、その少年はというと、ベファナーの店にどろぼうが入るところを目撃してしまうのですが、警察からは信用してもらえず、おもちゃを盗んだ犯人に間違われてしまいます。はたして「青矢号」に乗ったおもちゃたちは、事件に巻き込まれた少年を救うことができるのでしょうか…？（ちなみに少しネタバレになるかもしれませんが、二つの「不幸」が同時に重なり、それゆえに、その二つがお互いに「ピタリ」と解決し合う筋には、物語をじかに読んだ人だけが「なるほど」と言えるカタルシスがあります）。

あと数回となりましたが、四年生をしめくくるような気持ちで、一ページ、一ページを大事に読んでいきたいと思います。



(福西亮馬)

『ことば』（2～4年生）

『中学ことば』

『中学・高校英語』

『歴史入門』（高校）

担当 岸本廣大

今年度は山の学校十周年であると同時に、私自身にとっても、山の学校で講師を勤めて丸々五年という節目にあたります。五年間、様々なクラスを担当させていただきましたが、どのクラスの受講生もやる気にあふれていたことが強く印象に残っています。このやる気が山の学校の一つの特徴だと、私は思います。

この特徴は、私が今年度担当した「ことば2～4年」、「中学ことば」、「中学・高校英語」、「歴史入門（高校）」、そして途中からですが「中学英語」のクラスでも見られました。例えば、「ことば2～4年」ではオリジナルな物語づくりに取り組んでいます。実はこの取り組み、他の「ことば」クラスの作品に刺激を受けた子供さんの発案によるものでした。クラスが始まると、子供さんは早速「物語づくりしよう！」と言ってくれます。やる気を見せてくれる子供さんが常に主役であり、クラスを引っ張っていく存在なのです。講師である私は、そのやる気が霧散しないようにサポートする黒子でしかありません。

他のクラスでも同様です。「中学ことば」では、私が事前に用意した課題以外にも、生徒さんが読みたい古文や和歌に取り組むことがありました。「歴史入門（高校）」においては、クラスで取り組むテーマさえ、生徒さん自身が選び取ったものです。

もちろん、クラスがいつもやる気に満ちていたわけではありません。特に苦手な教科では、気が乗らない生徒さんもいます。今年度から山の学校で英語を学んでいる中学生も、春学期はそうでした。しかし、復習を重ね、「わかった」という経験はやる気につながります。それが成果として表れると、さらなるやる気も湧き起こる。この好循環が半年の間でその生徒さんを成長させました。冬学期に入ると、彼は学校の先生から「英語がわかるようになったね」と褒められたことを、嬉しそうに私に伝えてくれました。今では、もう一人の生徒さんと一緒に、自ら英語のプリントに取り組んでいます。

その、もう一人の生徒さんは、私が五年前に初めて担当した子供さんでした。当時のクラスは「かず」だったにもかかわらず、彼（あるいはその同級生）が学校の宿題である月の観察をしたいというので、外に出て一緒に空を見上げたことが、今でも印象に残っています。今思えば、山の学校が生徒さんのやる気を活かす学びの場だと実感したのは、このときだったのかもしれませんが。それは今でも、私のクラスの基本方針となっています。

かつて担当した生徒さんを数年後に再び担当すると、彼らの成長には目を見張るものがあります。英語を受講している高校生は、プレ英語から中学一年生まで担当した生徒さんでしたし、新しく開設された「中学英語」の生徒さんも、かつてプレ英語で担当していました。アルファベットも覚束なかった彼らが、今ではすらすらと筆を走らせる姿を見ると感慨もひとしおです。彼らに共通していた成長の秘訣こそ、当初から見せてくれた彼らのやる気だったのではないのでしょうか。

山の学校が、今後とも受講生のやる気に満ち溢れた場となるよう、他の講師や保護者の方々と一緒に、私も微力ながらお手伝いさせていただきたいと思います。

(岸本廣大)

『1』『2』『3』『4』の4枚のカードを4枚ともすべて使う並べ方は何通りあるか？という問題に対し、「答は $4 \times 3 \times 2 \times 1$ の24通りです」というだけでは、いかにも無味乾燥です。「なぜ、階段のようなかけ算になるのか？」という、そこに、(人にも説明できるほどの)深い合点がいくためには、最初は面倒くさいと思えても、「自分の手を動かすこと」、これ以上に良い方法はありません。

これは自身の思い出になりますが、私が上の問題に納得したのは、6年生の頃でした。その時期の早い遅いはともかく、それが「手を動かして考えた」と自分ではっきり覚えている、ほとんど最初の思い出でした。その納得の仕方を以下に述べますが、今思えばその時になって、「算数が以前よりも好きになった」と自覚したのだと思います。

まず、最初のカードの選び方ですが、4枚だから4通りあります。これは「当たり前」と言えば当たり前です。しかし、その当たり前を「次も」積み重ねられるかどうか、そこが大事なカギとなります。ここでは仮に、『4』を選んだとします。すると、残りのカードは『1』『2』『3』の3枚になります。ここで注目すべきなのは、何を選ぶかではなくて、カードが「1枚減った」という事実の方です。そのような認識に立つと、次はまた『1』『2』『3』の3枚のカードを…と、問題をリセットして考えることができます。そうすれば「最初」のカードの選び方は、3枚だから3通り、と、これまた当たり前の連続になります。同様に1枚減って、次は『1』『2』の2枚のカードを…と考え直します。当然、2枚だから2通りです。そしてまた1枚減って、最後は『1』の1枚のカードを…と、これはどうしたって1通りです。このように当たり前を突き詰めていくと、 $4 \times 3 \times 2 \times 1$ という計算方法にたどりつきます。つまり、そのかけ算の形は、カードが1枚ずつ減っていくことに対応していたというわけです。

私は、最初のうちはその問題に出会うたびに、逐一、(1, 2, 3, 4)、(1, 2, 4, 3) …と書き出していました。ですが、計算ドリルを家で復習していた時だったと思います。ある時から「1を固定する」ことに気付きました。それは誰でも思いつくことですが、自身の経験として、頭の中に「カツン」と何かを掘り当てたような手ごたえを感じたのでした。そして半信半疑で、その法則が真実かどうか確かめようとして、周りの友達に聞いたのですが、3枚は「6通り」で、4枚は「24通り」だと暗記しているようでした。「それだと、カードがもっと増えた時に答えられない」と、私は不満げだったのを覚えています。そこで私なりの説明を試みるのですが、それがまずかったせいもあるのでしょうか、「そんなこといちいち考えなくても済むことじゃないか。どうせ3枚か4枚しかテストに出てこないんだし」と返されて、がっかりしたのを覚えています。その「いちいち」を、「たった一度」でも確認しさえすれば、「どんな場合でも」計算できるのだという「大物」の手ごたえを、本当は伝えたかったのですが…。

$4 \times 3 \times 2 \times 1$ という数の並びには、自分で確かめることで、はじめのような無機質な冷たさではなく、有機的・構造的な美しさを感じられます。ちょうど、家で分からない言葉の意味を大人にたずねた時に、「辞書で調べなさい」と言われ、その通りにしてようやく会得できる、それと同じようなことが、算数でもあるのだと思います。

以上のことは、実際に5年生のクラスで取り上げた内容です。その時、生徒たちは口々に、「だって、さっきはこうなった。だから、次はこうなるはずだ…」と、自分の考えを説明してくれました。もちろん自分の手を動かして得た結論をです。それを聞くことは、私にとっても嬉しい出来事でした。

これは一つの例ではありますが、そうしたことをそれぞれのクラスの生徒たちと共有しているのだと思っています。

(福西亮馬)

早いもので、この「かず」クラスの生徒さんとは、まる2年間のつきあいとなります。これを機に、これまでの『山びこ通信』の「かず」の記事を読み返してみました。「かずの探求」の取り組みの様子の紹介が中心になっていました。もちろん、それでも書き足りないことはたしかです。しかし、実はクラスの毎回の持ち時間60分のうち、「かずの探求」に充てている時間は15分ほどです（これは2年間変わりません）。もしも「最も広がりを感じられる時間は？」と問われたら、私は「かずの探求の時間です」とお答えするでしょう。しかし、「最も厳粛な時間は？」と問われたら、「それはドリルの時間です」と即答します。

休み時間にわいわいとおしゃべりしていた彼女たちが、クラスが始まると一転、水を打ったように静まり返ります。私がなにも言わなくてもドリルを出し、おもむろに問題を解き始めます。それから

きっかり 30 分間。姿勢を正して問題を解くことに集中します。分からないところがあれば、手を挙げて質問します。余計なおしゃべりは一切しません。消しかすは床に払い落とさず、後でまとめてゴミ箱に捨てます。もちろん、山の学校に来るなら、当たり前のことです。しかし、小学校で嫌なことがあった日も、お母さんに叱られて涙が止まらなかった日も、変わらず 2 年間ものあいだその緊張感を保ち続けたことには、やはり敬意を表せざるを得ません。基本が凝縮されたこの 30 分間があるからこそ、その後の「かずの探求」で、豊かなやりとりが生まれたのだと思います。

彼女たちがこれまで解いてきたドリルは、1 人 12 冊以上。数が多ければいいというものではありませんが、おそらくご自宅に保管されているであろうその大量のドリルは、これから自分が困難なことにぶつかったときに、かならず何かを語ってくれるはずで、1 冊 1 冊に、自分の努力した時間が刻印されているからです。どうか 10 年先、20 年先まで、大切にしてください。

(高木 彬)

『かず』(1~2年生B)

『中学数学』(3年)

『中学・高校数学』

担当 浅野直樹

パターン化の功罪について論じます。

かず 1~2 年 B クラスでは毎回間違い探しと迷路をしています。すっかりこのスタイルが定着しました。安心して楽しめる一方で、ややマンネリ気味になっていることも否定できません。パターン化すると教師のほうも生徒のほうも何をするのがわかっているのでもやしやすいのですが、ややもすると単調な繰り返しに陥りがちです。

中学・高校数学クラスでは、生徒自身の要望にお応えして、一日一問の宿題を課すことにしました。数学の問題を解くということを習慣化してもらえればと思います。一日一問なら計画的に復習をすることもできます。あまりに一日一問にこだわり過ぎて、内容が疎かになるようでしたら見直そうと考えております。

中 3 数学クラスでは高校入試をにらんで実践的な問題を大量に解いています。そうすると有名問題で適用できるちょっとした公式が気になります。おうぎ形の面積 $= \frac{1}{2} \cdot \theta \cdot r$ (θ はおうぎ形の弧の長さ、 r はおうぎ形の半径) や、直方体で一番遠い頂点間の距離 $= \sqrt{a^2 + b^2 + c^2}$ (a, b, c はそれぞれ縦、横、高さ) などです。これらを公式としてパターン化しても構いませんし、あくまでも原理的に求めても構いません。パターン化すると時間を短縮できますが、応用問題に対応できなかつたり計算ミスに気づきづらかつたりします。要は自分のやりやすいような具合に使えばよいのです。

(浅野直樹)

『中学数学』(1~2年)『ユークリッド幾何』

担当 福西亮馬

これは中学 1~2 年生のクラスで、証明問題を解いていた時の話です。「どうしてわざわざ証明なんてことをするんですか？ 見たらわかるのに」と、一人の生徒がつぶやきました。証明が苦手だからというわけではなくて、むしろ慣れてきたからなのでしょう。懐疑的になるのは学びの自然な段階だと思います。

その生徒の言葉をフォローすれば、「見たらわかる」というのは、数学でも「視察により」や「自明」という言い方をするので、場合によっては使う表現です。ただ、すべての問題が「見たらわかる」というわけではないのもまた、自明の理です。

そこで、「(ぱっと) 見てもわからない」問題がある以上は、どうやったらそれを「見えるようにするか」がテーマとなります。ただし「何となく」や、個々の感覚に基づくような仕方では、その場限りのことにとらわれて弱く、誰がやってもうまくいき、誰もがそうだと頷けるような、普遍的な手続きを考える必要があります。普遍的であれば、結果を積み上げることができます。その一つが、数学の「証明」です。

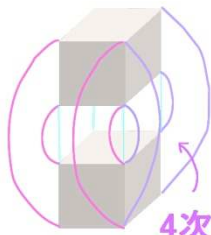
そこで授業では、一例に「次元」という話をしました。点の位置を表す情報の一つを「縦」とし、縦で表せない情報を「横」、縦でも横でも表せない情報を「高さ」とします。私たちは、縦、横、高さで表された位置にある点を、または縦、横、高さによってボリュームを持った立体を「見る」ことができま

す。けれども、縦でも横でも高さでも表せない、第 4 の位置情報を持った立体は、どうやったら「見る」ことができるのでしょうか。それをこれから、頭の中で実験してみましょう。

まず点は何の情報も持たない 0 次元のものと定義します。その点を 2 つ用意し、その間をつなぎます。すると、その間に「線」が出てきます。線は 1 次元（ここでは縦とします）のものです。次に、線を 2 本用意します。そして、その間を（各点で）つなぎます。すると、線の間「面」が出てきます。面は 2 次元（縦と横）のものです。そして面をまた 2 枚用意し、その間をつなぐ（貼り合わせる）と、「立体」が表れます。立体は 3 次元（縦と横と高さ）のものです。「見たらわかる」という世界は、ここまでになります。ですが、上の手続き自体は、まだ先へと続けることができます。

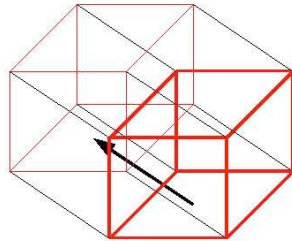
では、4 次元のものを考えてみましょう。それは同様の手続きを踏めば、先の 3 次元の立体を 2 つ用意し、それらを貼り合わせた「間」に出てくるものはずです。つまり、どんなものが出てくるかは先に想像できなくても、手続きが間違っていない以上、後に出てきたものが「それだ」と言えるわけです。

ちょうどこの時、一人の生徒が「(作り方が) 展開図みたいだ」と言いました。私もそれが的を得た表現だと思いました。



4次元!

面と面(6つ)を張り合わせてできる立体(胞)



(左図の二つのサイコロの「貼り合せ」での解釈が難しければ、右図のように考えることもできます。すなわち、4次元立方体とは、縦、横、高さで表された「サイコロ」を、縦でも横でも高さでも表せない第 4 の方向にずらしてできたものと解されます。第 4 の方向と言うとオカルトチック(?)に聞こえますが、何のことはなくて、ベクトルで言うところの $(0,0,0,1)$ 方向のことです)

さて、上の絵では、この先、5 次元、6 次元の立体はもう描くことができません。ですが頭の中では、まだその先を考えることができます。このように「まだ知る」可能性を提供してくれる数学を、そしてその基礎となる証明を、練習しておいても損にはならないと言えるのではないのでしょうか。

また、少なくとも（科学は全般にそうですが）、「現象（見えるもの）から原理（見えないもの）を想像する」ことは、将来様々な発明を生み出したり、現実社会を支えている骨組みを考える上でも重要なことだと思います。そのためのアイデアを、今はひと通り学んでいると言ってもよいでしょう。

(福西亮馬)

『中学英語』（1～2年生）『英語講読』『英語論文』担当 浅野直樹

英語を習い始めたばかりの中学 1 年生から習い始めて十年以上になる一般の方のクラスを担当しており、英語の力は様々ですが、楽しみながら学ぶということは共通しています。

中学 1～2 年生のクラスでは生徒の要望から単語カルタを取り入れています。楽しみながらだとよく覚えられるのか、こちらが驚くほどの記憶力が発揮されることもあります。自分なりの歌を作って疑問詞を覚えている生徒もいました。また、カタカナ語としてすでに知っている語を英語と対応させるということもたびたび起こりました。こうした雰囲気楽しく英語を学んでいます。

英語論文クラスでは自分の興味のある分野の論文を読んでいますので、おもしろくないはずがありません。内容を知りたいという気持ちが強いほど、うまく内容をつかめないときのもどかしさも大きくなりますが、英語の文法に関する部分はこちらで解決することができます。内容を考えないと解釈できない場合もありますが、そのようなときもいっしょに考えることで、たいしてはすっきりとした結論を出すことができます。

英語講読クラスではハリー・ポッターシリーズの第 2 巻 *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (『ハリー・ポッターと秘密の部屋』) を読んでいます。「なかなかスムーズに読み進められないけれど、内容がおもしろいので継続できる」という受講生の声が聞かれました。同感です。しかも同じ箇所を複数人で読むので楽しさも倍増です。

(浅野直樹)

春学期と秋学期のこの欄では、隔週で取り組んでいる実験の話題を中心に書きました。今回は、そのほかの取り組みについて簡単にご紹介します。

二週間に一度、実験のない週には、練習問題を解いてもらいました。これまで習った範囲を單元ごとに復習しました。現在、受講している3人は、中学2年生です。それぞれの単元の基礎問題を解いた後には、高校入試も視野に入れて、入試問題にもチャレンジしてもらいました。「入試問題」と聞くと、難解な印象を受けます。しかし、基礎がしっかりしていれば、恐れることはありません。あるとき、Y君が「入試問題のほうが簡単やった」と言ったことがありました。理科の単元の中には、得意なものも、そうでないものもあります。しかし、得意ではない（と自分が思っている）單元ほど、基礎問題の段階で個別にフォローすれば、その伸び幅は著しい。「入試問題のほうが簡単やった」という言葉からは、基礎が身についたことへの自信が読みとれました。

実験や練習問題のほかには、僕たちが「質問コーナー」と呼び習わした時間もありました。始まりは4月の最初の授業。小さな装置を使って、上昇気流によって回転する風車の実演をしたときでした。上昇気流が起こるのは、熱せられた空気が膨張して軽くなるからだということ。空気を熱すると軽くなるのは、熱エネルギーを得ると空気を構成している分子の運動が活発になり、分子と分子の間の距離が広がって密度が低くなるからだということ。空気を構成している分子には、窒素（78.1%）、酸素（20.9%）、アルゴン（0.93%）、二酸化炭素（0.032%）などがあるということ。そこまで解説したとき、M君は言いました。「アルゴンって、どういうはたらきをしてるの？」思い返せばこれが、「質問コーナー」の始まりでした。たしかにアルゴンは、実は二酸化炭素よりもはるかに多く含まれているにもかかわらず、あまり知られていません。希ガス元素の一つであり、陽子と電子の数が釣り合い安定しているため、ほかの原子とほとんど化合しない。また、原子量（原子の重さ）は40。空気の平均分子量は28.8だから、空気より重く、原子量2の希ガス・ヘリウムとは違い、宇宙空間へは拡散しない。化合物にならず、拡散もしないので、空気中に混ざるよりほかない。つまりアルゴンは、酸素や二酸化炭素のように何かのはたらきを担っているから空気中に含まれているというよりは、どこにも行き場がなかったから空気中にとり残されたのです。「アルゴン」の語源は、「不活発な」を意味するギリシャ語 *αργον* です。（この物質の面白さに着目した安部公房は、短篇「魔法のチョーク」の主人公の名前を「アルゴン君」としましたが、これは余談です。）

ともかく、このアルゴンを始まりとして、その後、切れ目なく質問が続いたので、コーナー化したのです。H君のブラックホールについての質問からアインシュタインの相対性理論の話になったり、なぜ握った手（細い筒）の隙間からだとよく見えるのかという質問からピンホール原理の話になって実際にピンホールカメラを作ったりと、実に豊かな時間になりました。

ただ最近では、こうした質問形式に飽き足らず、「自由研究」に重心がシフトしてきています。たしかに、自分が「これは！」と思う疑問については、納得のいくまで自分で調べ尽くさなければ勿体ない。「中学理科」という枠をはるかに超える研究に期待しています！

（高木 彬）

『ロボット工作』

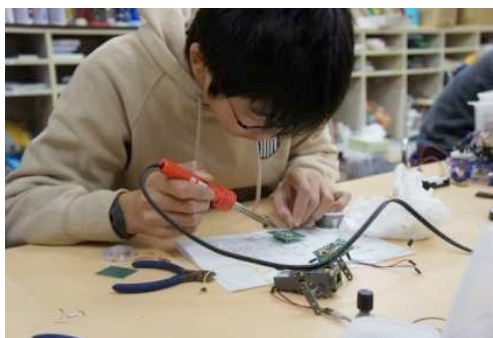
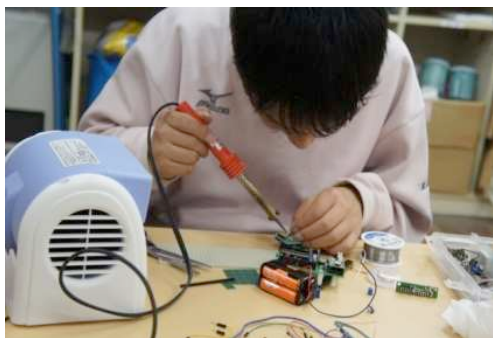
担当 福西亮馬

ある時、半田付けが「うまくなりたい」と思い立ったA君が、棚から予備の基板を一枚持ち出して、自ら半田づけを練習していました。時間に換算すれば10分ほどの短い出来事でしたが、以下に述べるようなコツを自分で掴んで腕を上げてくれました。それはA君の自信となったようでした。

半田付けでよくしてしまう間違いは、熱する順番です。正しくは「半田からパーツ」ではなくて、「パーツから半田」です。ただ、そのように言われても、最初はなかなかピンと来ないものです。そこでA君のように「うまくなりたい」と自分からアクションを起こしたところにそれなりの手ごたえがあったことは、良かったことだと思います。またある時、A君は自分のスマートフォンでその日の進捗状況を写真に撮っていたのですが、その拍子に、「やっぱり半田付けをした後は達成感がありますね」と言うことがありました。そして「今のこれ（モーター



ドライバー) ができたら、次はもう少しきれいに半田付けしたいですね」とも。実際の基板を見せてもらおうと、半田付けした面は十分きれいなのですが、それでもまだ「ここを改善したい」という意欲があるようです。そのような A 君の「1 個できたからもう十分」と思わないところに感心しました。



3 年生の A 君がそうであるように、2 年生の H 君と 1 年生の R 君もまた、一つ一つの出来事の進展に素朴に喜んではまだ、熱心に取り組んでくれています。ロボット工作というと、人型のロボットやガジェットをいじったパフォーマンスが思い浮かびますが、クラスで大事にしていることは、その中身をより細かなパーツで組んで理解するという事です。「やっとモーターが動いた！」や「無事にプログラムが送れた！」という感動は、地味と言えれば地味かもしれません。また 80 分という時間はあつという間で、なかなか思うように作業の進まない日もあります。しかし、もしこうした取り組みに何か達成感を見出してくれるとすれば、このクラスを作った甲斐があるというものです。

冬学期は、以前に引き続き、モータードライバーの自作に取り組みました。PWM 制御も少し勉強しました。また自作したモータードライバーが PWM 制御に対応するためには、H ブリッジ回路の上段の FET (Pch) をしっかりと閉じる必要があります。そこで信号との間にもう一段 FET (Nch) を追加する工夫を取り入れました (ゲート・ドライブの改良)。また最近では、液晶キャラクタディスプレイ (LCD) に “Hello World!” と文字を表示させました。これは電子工作の定番ですが、やはり「はじめて」の出来事には、ひとしおの感動があります。その時、配線の多さに苦労を感じたので、時間がある時にまた半田付けをして、そのモジュール化をしています。残りの授業では、赤外線センサーの値に応じてモーターを動かし、その値を LCD で確認する実験を考えています。そのように、少しずつではありますが、マイコンの周辺部品を充実させて、よりロボットに近づけていこうとしています。

(福西亮馬)

『調査研究入門』

担当 浅野直樹

同じテーマに一年ほど取り組んでいます。そうすると自分の考えが整理されていく反面で、新たな着想が出てこなくなります。自分ひとりが考えていることなんてたかが知れています。夏休みに中間発表を行って、質疑応答から新たな視点を得ましたが、それも消化した感があります。

そのような中、冬期講習の国語のクラスで、担当の先生の粋な計らいにより、今調べていることに関する本を読む機会に恵まれました。そしてそれをきっかけにして新たな着想が生まれました。読んだ本と新たな着想とのつながりを論理的に説明できるほどではありませんでしたが、とにかく読んだことをきっかけにして着想が生まれたのは事実です。

図書館や書店で目を引いた本を読むのもいいですし、誰かからすすめられた本を読むのもいいです。どこから入ろうが、自分のテーマを持って読書を進めれば、たいていは同じ場所に行き着きます。自分の考えを整理し、新たな着想を得るためにも、本を読むことを強くおすすめします。

(浅野直樹)

『中学ことば』『中学・高校英語』担当 岸本廣大

(→14 ページ)

『歴史入門』(高校) 担当 岸本廣大

(→14 ページ)

『中学数学』(中3)『中学・高校数学』担当 浅野直樹

(→16 ページ)

『ユークリッド幾何』 担当 福西亮馬

(→16 ページ)

『漢文入門』

担当 木村亮太

早いもので、年が明けて1ヶ月ほどが経ちました。

私たち漢文入門クラスでは、先学期に引き続いて『莊子』齊物論篇を読んでおりますが、この篇ももうすぐ終わりますので、この「山びこ通信」がみなさんの手元に届くころには、次の養生主篇へと進んでいることだろうと思います。

齊物論篇は『莊子』一書のなかでも特に重要な篇とされていますが、その非常に難解な文章は、古来、多くの異説を生んできました。『莊子』という書物には、実に多くの邦訳が作られています。それらのいくつかを手にとってみると、それぞれに異なった解釈がされているということが少なくありません。

授業でも、思想内容を理解するために時間を取られることも多く、私の力不足で、十分に納得してもらえないような説明ができないことも何度もありました。語法の勉強というような“漢文入門”の趣旨にはそぐわないのではないかと、初めのうちは迷いながら授業を進めていました。それでも、受講生のお二人がとても熱心に授業に臨んでくださったおかげで、かえって私の方が励まされるようにして、長い長い齊物論篇を篇末まで読み進めることができました。お二人には本当に感謝しています。

さて、難解を極めた齊物論篇ですが、反対に良い傾向も現れています。今回は『莊子集釈』というテキストを使用していますが、これには歴代の『莊子』に対する注釈が集められています。集釈の部分はやや繁雑でもあり、授業ではもともと参考程度にしか扱わないつもりでした。ところが、受講生のお二人は、辞書や邦訳の説明だけに満足せず、進んでこの集釈をご自身の予習にも活用し始めました。注釈を読むには、またそれなりの技術が必要なのですが、これまでの応用で読まれているようで、私もとても嬉しく感じました。

(木村亮太)

『イタリア語講読』

担当 柱本元彦

今学期も三名で、引きつづきタブッキの『黒い天使』第二章からはじめました。ですが誰が誰に話しているのかも判然としないうねうね文にさっさと見切りをつけ、学期半ばで次のテキストに進むことにしました。従属節が多くて接続法や条件法の大波小波にもう酔いそうでした。けれどもおかげでいろいろと調べることができました。調べても明快なく解決には至りませんが、日ごろ疎かにしていた文法について意識を新たにしました。広川先生の「ラテン語では…」に刺激され、イタリア語とフランス語・スペイン語の文法比較もなかなか面白いことに気づきました（この作業はしばらく継続するでしょう）。授業のほうは現在モンターレ（1896-1981）の『この時代のなかで (Nel nostro tempo)』という散文集を読んでいます。タブッキの『黒い天使』はモンターレに捧げられていましたが、実際のところこの詩人の名は、現代イタリア文学のくいたるところに現われます。ランドルフィに『月ノ石』（河出書房）を書かせたモンターレの山里の家などとりわけ印象的でした。ずっと気にしていた作家でしたが、邦訳もなく何より詩を読むことは簡単ではありませんから、手にもせず敬遠していました。ところが偶然、おそらく二十数年前の留学中に買ったとおぼしきブツを発見。誰だったか、書棚を見ればその人の頭のなかに何がどのように入っているかが分かる、と言った人がいました。たしかにその通りと考えますのでわたしは誰にも自分の部屋を見せません。どこに何があるのかわからないのかまったく分からないカオス状態ですのでね。ともあれまさに埃にまみれていたモンターレは、さいわい詩集ではなく量的にも適当な晩年の短文アンソロジーでした。読みはじめるとタイトルにある通り文明批評で、いわば『大衆の反逆』的な捉え方をメインに打ち出した文章です。最初の数ページに目を通して、堅固に根づいたヨーロッパ的人間主義につくづく感心しました（この人間主義の崩壊を詩人は嘆いているわけですが）。たしかにポストモダンの思想もこのような基盤があつてこそだったのでしょう。手応え充分な文章の解説にはある程度の予備知識も必要かと思われ。このところ格闘タイプのテキストばかりですね。。

(柱本元彦)

『フランス語講読』

ひろなり
担当 武田宙也

このクラスでずっと読みついできたダニエル・アラスの『絵画のはなし』ですが、本書は今学期で一区切りとなります。

入門書という体裁をとりつつも、時にかなり専門的な内容も差し挟まれる本書でしたが、受講者の方の熱心な取り組みもあり、ここまでかなり順調なペースで進んでいくことができました。また、内容の理解に関しても、個々の絵画論の玩味はもちろんのこと、著者アラスの思想そのものにもかなり近づくことができたのではないかと考えています。最近では、本書の内容から出発して、受講者の方とあれこれ繰り広げるおしゃべりも楽しみのひとつとなっています。

ここまでの歩みを振り返ってみても、決して急ぎ足であった感じはしません。むしろ一歩ずつ、着実に歩を進めてきた、と言った方が正しいでしょう。はじめは一文ずつ、文の意味だけを考えながら読んでいき、それが一つの段落、一つの章というように、まとまった分量を経過するにつれ、著者の語っていることの全体が、立体的に浮かび上がってくる瞬間があります。山登りに例えるならば、紆余曲折を経て到達した頂から、これまでたどってきた道のりを一望するような感じでしょうか。それは、心地よい疲労感とともに、ある達成感をもたらすものです。

もちろん、こうした体験は、日本語による読書でも（とりわけ、少々難しめの本をよむときに）味わうことができるものですが、慣れ親しんだ言語と勝手が違う外国語では、より困難を伴うぶん、山頂にたどりついたときの喜びもひとしおです。このクラスでは、こうした喜びを分かち合うべく、やみくもに前進するのではなく、ときに後ろも振り返りながら、ゆっくりと歩を進めてきたのです。

ところで、立場上は教える側になっている私ですが、授業のなかでは、受講者の方の鋭い質問から、逆にさまざまなことに気づかされた経験も一度や二度ではありません。その意味で、授業のなかで得られた理解や気づきは、この相互の教授の賜物であるといえましょう。このように、教える側も教えられる側も、ある意味で対等な立場でひとつのことに熱中できるということ、それがこの山の学校のすばらしいところなのではないかと思えます。

「フランス語講読」では、春からはテキストを一新して、新たな頂を目指す予定です。また、「フランス語入門」でも随時受講生を募集しております。楽しくおしゃべりをしながら、山道を連れだって歩いていただけるお仲間の参加をお待ちしております。

(武田宙也)

『ロシア語講読』

担当 山下大吾

前学期まで入門クラスだった当クラスは、受講生 T さんのご努力の甲斐もあり講読クラスに「昇格」いたしました。記念すべき最初の講読用のテキストとして T さんにご相談した結果、ワルワラ・ブブノワ女史の作家網野菊苑の葉書を取り上げました。葉書は私が個人で所有するものです。

女史は日本におけるロシア文学研究やその教育史を語る際欠かせない人物で、その草創期に活躍された先生方は押しなべて女史の薫陶を受けられており、また本来画家であったことから、当時の芸術家や文学者との交流の点からも重要な役割を担っています。T さんは女史の伝記を通じて以前から興味を抱かれていたと伺い、このようなまたとない講読の授業が実現することになりました。書簡体ということもあり文体も柔らかく、文法的にも初級講読に相応しい程度のもので、ロシア語の筆記体がどのようなものか確認する上でも格好の教材になったのではと思われます。もちろんその内容も、ソ連帰国後の自身の生活や、チャーホフの訳などで著名な湯浅芳子について触れられるなど興味深いものです。

現在はトゥルゲーネフの『散文詩』を読み進めています。ラテン語の原題 *Senilia* 「老いの言葉」からも明らかなように、彼がこの世を去る直前に綴られた詩編は、主題としては多岐に渡るものの、そのいずれもが彼ならではの美的観照の眼に貫かれています。彼はこの詩編を一息に読まず、一日一編ずつ味読していくよう勧めていますが、T さんは一編ずつなんてとんでもないと一言、ノート一杯の書き抜きと自ら編まれた註釈を手元に毎回授業に臨まれています。

(山下大吾)

『ラテン語講読』（初級 A・B・D） 担当 山下大吾

私の担当するラテン語講読クラスでは、いずれもキケローの作品に取り組んでおります。A クラスでは、一昨年の冬学期から取り組んでいた『カティリーナ弾劾』を、底本に収められた第二演説まで無事読了することができました。様々なレベルの読書が存在する中、講読用のテキストとして日々親しんできた本を一冊「挙げる」喜びはまた格別のものであります。これも開講以来継続受講下さっている A さんと H さん双方の情熱あつてのもの、お二方の変わらぬご努力に心から拍手を贈りたく思います。来学期は『友情について』の始めの部分を読み進める予定です。

B クラス、並びに D クラスでは、『友情について』とペアを構成する対話篇『老年について』を読み進めています。昨年の春学期冒頭から読み始めた B クラスでは、今学期中の読了の目途が付き、このクラスでも「挙げる」喜びを受講生の方と近々味わうことになりそうです。途中ブドウ栽培など農業に関する話題が集中して出てきましたが、嬉々として語るカトーの言葉に熱がこもればこもるほど、見慣れない単語や不確かな状況説明に苦しめられた経験も今となっては懐かしく思い起こされます。D クラスでは、受講生の方のご希望もあり、次学期から『義務について』に取り組む予定です。

キケローのみならず古代の政治家はすなわち優れた弁論家を意味し、彼らは今我々が読んでいくテキストをほとんど暗記して、しかも過度な演出に走らぬようトガを右手に巻き付けた上で弁論に臨みました。その伝統は現代の欧米の政治弁論にも受け継がれています。多弁を戒める文化であることを重々弁えた上での話題になりますが、野次を飛ばすことにのみ情熱を注ぎ、演出はおろか、首相を始め各議員が直立不動で原稿を棒読みする某国国会の様をキケローが目にしたら、O tempora, o mores! 「何という時代、何という習わしだ」と嘆くに違いありません。

(山下大吾)

『ラテン語講読』（初級C） 担当 前川^{ゆたか} 裕

このクラスでは、セネカ『ルキリウスへの手紙（倫理書簡集）』を継続して読んでいます。今学期は第 49 書簡から読み進めています。受講生は従前より引き続いて参加していただいている社会人のお二人で、いずれも高槻と神戸からと遠方ですが、熱心に通われています。講読の授業では、1 回当たり Loeb のテキストで 15 行前後を宿題とし、単語調べや訳を準備いただいた上で、授業において順番に訳読をするというスタイルです。授業では、基本的な文法事項（動詞の活用や、基本的な構文など）を随時チェックし、基礎知識を確認しています。日本語訳や Loeb の英語訳も参照しつつ、どうしてそのような訳文になっているかということも考えながら読んでいます。

セネカの書簡は哲学的な内容を平易に語っている、創作の手紙です。エッセーよりもかなり短い単位で読み切ることができるので、達成感を味わうことができます。第 49 書簡は「人生の短さについて」と呼ばれており、同名のエッセーと共通するものがあります。机上の空論、無駄な議論を重ねていることで無駄にする時間はないのだ、と論じています。その中の一節に、「死は私を追いかけるが、人生は私から逃げていく」(Mors me sequitur, fugit vita.) というものがありました。死が後ろから常に迫っているのに、現世にうつつをぬかして本当に大事なことをする時間は無くなっていく、という含意でしょう。現代の私たちと全く変わらないことだと、むしろ瑣事にかまけることが多い現代にこそ生きてくる言葉だと思えます。

テキスト読解が終わったあとは、おまけの話として、西洋古典に関する話題を提供しています。今期はラテン語のラジオ放送の録音を聴いたり、バチカンでラテン語教育の推進が始まったことなどを紹介しました。

都合により、私がこのクラスを担当するのは今期で終わります。これまでお世話になりありがとうございました。初級講読クラスそのものはもちろんこれからも続きます。次学期のテキストも引き続きセネカ書簡集の予定です。初級講読は、初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加でき、参加者に合わせた進度で進めます。興味を持たれた方はぜひお問い合わせください。

(前川 裕)

『ギリシャ語初級講読』（A・B・C）

『ギリシャ語中級講読』

『ラテン語入門』『ラテン語中級講読』

担当 広川直幸

私が山の学校で古典ギリシャ語とラテン語を教え始めてもうすぐ五年が経つ。平成20年度の春に初めて担当した授業は新規のギリシャ語入門と山下先生から引き継いだラテン語中級講読の二つであった。ギリシャ語入門はその後『イーリアス』講読などを経て今は中級講読になり受講生の希望でトゥーキューディデースを読みながら悪戦苦闘している。現在、非常に有名でありまたおそらく古典期アッティカ散文の中で最も難解な「ペリクレスの国葬演説」を読み終えたところである。ラテン語中級講読はずっと同じ曜日・時限で続いている。山の学校開校時からの受講生一名とウェルギリウスの『農耕詩』を読み終え『アイネーイス』に移って少ししたところで受講生の本来の興味分野と私の関心が一致したのでテキストをペトルルカに変更し現在は『わが秘密』を読んでいる。ペトルルカのラテン語には中世ラテン語の名残が残っていて綴りも文法も古典ラテン語とは微妙に違う。それでも人文主義の父のラテン語は中世ラテン語からの脱却と古典ラテン語への回帰を志向している。思想面のみならず言語面でも中世からルネサンスへと移行してゆくことが感じられ興味深い。

平成21年度春に新規のギリシャ語入門として開講し現在ギリシャ語初級講読Aになっている授業ではかなりの量を読んできた。一年かけて入門を終えた後プラトンの『ソクラテースの弁明』を約一年ですべて読み次に『新約聖書』の「マタイによる福音書」をこれもおよそ一年で全部読んだ。現在は『オデュッセイア』を読んでいる。この授業で読んだ『ソクラテースの弁明』は今までになく心に響いた。また「マタイによる福音書」を読むことでギリシャ語の歴史的变化に対する感覚が研ぎ澄まされるのを感じた。

平成21年度秋学期から開講しているラテン語入門はHans H. Ørberg, *Lingua Latina* という優れた教科書を用いて学び続けている。現在二冊目の *Roma aeterna* の *Capitulum XLVI* (46 課) でエウトロピウスの *Breviarium ab urbe condita* の王政後のローマの歴史の部分を実典のまま読んでいる。エウトロピウスは最近あまり読まれないが以前は歴史の教科書として重宝されたそうである。後期ラテン語で書かれているので、古典ラテン語と多少の違いはあるものの易しいので気楽にどんどん読める。*Lingua Latina* はこの課から実典からの抜粋になる。それに加えて一課ごとに全問ラテン語で答えなければならない練習問題が大量に付いているので普通の実典講読の授業よりも難しいのではあるが粘り強く学んでいる。

平成23年度春学期にはギリシャ語入門AとBの二つのギリシャ語入門を開講した。今では入門Aは初級講読Cになり入門Bは初級講読Bになっている。入門Aは初めて中学生を迎えての授業であったので教材選びの段階で苦勞した。大学生相手に文法用語を多用し暗号解読のような短文ばかり読ませる教科書は使えない。さりとて昨今主流になっている読解中心の教科書は *Reading Greek* や *Athenaze* のように大部であり“μέγα βιβλίον μέγα κακόν”の格言そのままである。そのような状況で Peckett & Munday, *Thrasymachus* を選んだのはどうやら正解であった。一冊で完結していて物語の読解中心でしかもその内容は抜群に面白く文法解説は最小限で練習問題は豊富である。初めは戸惑っていた受講生が教科書のおかげかどんどん読めるようになって行くのを見るのは非常に喜ばしい体験であった。この授業は初級講読Cになって今は『新約聖書』の「マルコによる福音書」を読んでいる。

入門Bは今思い返しても大変な授業であった。ラテン語既習の受講生が対象であったので文法訳読方式のほうが慣れているであろうと考えて往年の定番教科書 J. W. White, *First Greek Book* (絶版) を海外の古書店から取り寄せて用いたのだが、昨今の学生ならまず途中で音を上げるであろうスパルタ式の教科書であった。教える側ですら大変であったのに、受講生はこれを月に二回、一回二コマ分というタイトなスケジュールで一年で見事やり遂げて、今では講読Bでプラトンの『饗宴』を実典で読んでいる。しかも、North & Hillard, *Greek Prose Composition* を用いた作文の練習までしている。

どの授業も受講生の熱意に支えられて成立しているようなものである。大学の授業でこれほど熱意のある学生に接する機会は少ない。私の教え方はカルチャーセンターなどとは真逆で相手に見込みありと見れば厳しく鍛え上げるものである。よくぞ付いてきてくれたと思う。私事になるが平成17年に半身を引きちぎられるような筆舌に尽くしがたい喪失体験をし翌年から絶望のどん底で大学講師の仕事をはじめた私にとって平成20年から山の学校でやる気に満ち溢れた受講生に接することができたのは一種の救いであった。ここに感謝の意を表したい。また、山の学校の記念すべき十周年を期によりいっそう受講生の意欲に応えられるように研鑽してゆきたい。

(広川直幸)

『ギリシャ語入門』・『ギリシャ語初級講読』を受講して

福西亮馬

中学3年生の頃に、「ビー動詞はあるのに、エー動詞はいつ出てくるんですか? (授業でもうしてしまっただけですか?)」と、真顔で先生に質問したほど、私は箸にも棒にもかからない英語音痴でした。そんな私が、“Thrasymachus”という、英語で書かれた教科書で、古典ギリシャ語を習うことには、正直最初からまったく自信がありませんでした。

しかし広川先生の手ほどきを受けるとすぐに、選定された教科書がとてもよいものであることに気づき、それを懇切丁寧に教えていただいていることに感謝しました。復習はまだまだ課題としてあるにせよ、それでも去年、その本を使って文法を一通り終え、今は『マルコによる福音書』を読んでいます。原文を読む楽しみは、これでもかこれでもかというほどに新鮮です。キリスト教徒でない私でも、二千年来読み継がれてきた書物から伝わる人々の体温や肉声を感じ取れることは、知的好奇心をくすぐられる以上の喜びだと言わざるを得ません。

さて、私がギリシャ語を学びたいと思ったきっかけですが、一つには、広川先生のクラスが千載一遇のチャンスであると感じたからです。以前ギリシャ語クラスに通っておられたMさんが、「広川先生は、理路整然たる解説によって理解へと導いてくださる」と感想を述べておられましたが、今もってまったくその通りだと実感しました。

学び始めの人の気持ちを思い出せることはとても貴重な経験です。私も山の学校でことばやかずのクラスを受け持っていますが、教える立場になっても学び続けることができることは、どんなにか有難いことであり、どんなにか嬉しいことでしょうか。それを改めて感じました。つまり、広川先生に毎週教えていただくおかげで、私自身が以前より教えることに対して肩肘を張ることなく、楽に息をつけるような気持ちでした。

もちろん現実の予習はそう易しいものではありませんでした。よちよち歩きの幼児が言葉を覚える時と同じく、単語一つ一つの意味を調べて確かめる必要があるので、毎

週5時間以上かかっていました。夜中に起き出しては朝まで四苦八苦していることも、ままありました。そして「こんな体たらくでは申し訳ない」と、授業の日をおっかなびっくり迎えていました。ですが、ひとたび授業が終わるなり、その日教わったことを反芻しながら、夜空に向かって喝采を上げたくなるほど、気持ちが高揚して帰ったこともしばしばでした。それほど充実した授業を広川先生にご教示いただいていることは、稀有な幸運だと感じます。

ギリシャ語を学ぼうとして、もう一つ後押しされたことがあります。それは、今実際にギリシャ語クラスと一緒に受講している、Aさんの存在でした。このAさんは、中学3年生(現在高校1年生)で、「ギリシャ語を学びたい」と言って、山の学校の門戸を叩かれたのでした(それをきっかけに作られたクラスへ後から私が飛び込んだ格好となります)。中学生がギリシャ語を学ぶということは、まったく山の学校始まって以来のことでした。もしかしたら、日本でも数少ないことかもしれません。そうした偏見のない、勇気あるAさんに対して「すごい」という尊敬の念から、「私もどうかお供させてください」と思い立った次第です。

こうしてギリシャ語を広川先生から教わり、Aさんと一緒に学んできて、はやくも2年が経とうとしています。けれどもここで最後に述べさせていただくことは、もしAさんのような若い時から向学心にあふれた学生さんが横にいらっしやらなければ、私はきっと仕事の忙しさを口実に、ギリシャ語の勉強を挫折してしまっていたことでしょうか。予習が追い付かない日々は、Aさんが私の担当も全部引き受けるという光景もままありました。そんな時、Aさんの声を隣で拝聴し、ノートに書き写しながら、「すごいなあ」「大したもんだなあ」と、自分もまた負けてはいられないのだと励まされたのでした。

そのような支えられることがあって、今もギリシャ語を少しずつ学んでいます。学びたいと思って学べる環境があることは、本当に有難いことだと思います。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

(福西亮馬)

異動のお知らせ

今年度で退職される先生をご紹介します(敬称略)。氏名の右横は新年度の肩書きです。お世話になった先生方、ありがとうございました。新天地でのご活躍をお祈りしています。

こうた
岸本 廣大

日本学術振興会特別研究員

ひろなり
武田 宙也

同上

ゆたか
前川 裕

関西学院大学理工学部専任講師／宗教主事

ひろし
和田 浩

司法修習生

(山下太郎記)

子曰わく一学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや

朝9時から始まる勉強会の前の30分、太郎先生の論語の素読で毎回欠かさず輪唱する孔子の言葉です。「習ふ」=復習する。勉強をする過程で既習のことを振り返ることは、分かったつもりになっていたことに気付き、改めて理解し直す機会となり、まさに勉学の喜びを感じるのだ、ということです。勉強会ではこの言葉の意味の深さがさまざまな角度から感じ取れます。それは勉強する子どもたち側の学びでもあり同時に、その勉強を見る立場としてのぶれない軸でなければならないからです。

子どもたちにはもちろん様々な性格があり、それぞれのペースがあります。それに、毎回それぞれが色んな気持ちでお山を登って来るでしょう。最初から最後まで一言も発さずに黙々と取り組む子もいれば、気が散ってしまったり、家から持ってくる課題がすぐ終わってしまい、違うことをしようとしてしまう子もいることは事実です。でも、せっかく一歩ずつ山の上まで登ってきたのだから勉強会においても、きっと見えるであろう清々しい景色を、見せてあげたいと思うのです。

1月19日の勉強会のことです。1年生のHちゃんは、以前に勉強会に来た時よりもたくさん目に課題を持ってきましたが、勉強するスピードも比例して早くなっているので、まだ9時半なのに1時間半を残して終わってしまいました。するとHちゃんは、あのね、ちょっと、絵を描きたいの、と少し後ろめたそうに色鉛筆を取り出しました。私はちょっと待ってね、と言いました。いま、お兄さんお姉さんも勉強まだしてはるね、せっかくここまでお勉強しに来たんやから、最後までやってみようか、できるはずだよ。……するとあっさりと「うんっ」といういい返事が返ってきました。その様子を、4年生のY君、3年生のIちゃんもじっと見ていました。

さて、注目は、それからです。私はさっきHちゃんが終わらせてしまったドリルでつまづいていた、ひと桁引くひと桁の算数の問題を裏紙に15個だけ作りました。丁寧に解いて、全部正解。同じレベルのをもう15個。スピードはまだ遅いけれど、全部正解。次は足し算と引き算を混ぜて15個、すると間違いが出てきて、悔しい気持ちを知るHちゃん。足す、と、引く、は気をつけなければいけない。さっき出てきたのを使えばこう解ける、などの細かい「気づき」があり、Hちゃんの頭の中の神経の、引き算足し算で使う神経系が手を伸ばし合い、繋がっていくのが目に見えるようです。高学年の2人も、

お互いに教え合ったり、自分の勉強の合間に1年生Hちゃんの問題づくりに参加してくれたり(既習の問題を、それを勉強中の低学年の目線で作る、ということも新しい気づきがあります)、とてもいい空気が漂って来ました。10時半。そうこうしながら「あと30分しかない!」となるのは、毎度のことなのです。

もうHちゃんは一時間も引き算、足し算、ときどき3つの足し算、二桁引く一桁の引き算などを解き続けています。明らかに間違いも少なく、間違ってもそれに一瞬で気づくようになり、集中力も高まって、エンジン全開です。いや、最初から集中力をみんな持っているのかもしれない、と私は思いました。勉強会においてその発芽しようとする潜在力を活かすも秘めたままにするのも、あの私の「ちょっと待ってね、」次第だったかもしれせん。改めて自分の一言の重みに気づくのです。

もうすぐ11時、終わりの時間が近づいて来ました。あれからHちゃんの解いた足し算引き算の数をみんなで数えました。

「……377個!!!」

当のHちゃんはというと、間違った問題が気になって考え顔。あとから、「勉強会でこれを6年生まで続けたら1万、なるかなあ!」と言っていました。その笑顔は清々しく、登頂成功!といった顔でした。

たとえ1万に届かなくても、次回の勉強会ではまた「ちょっと待ってね、」ということになっても、いいと思います。その度にまた少しだけ方向を示してあげれば、誰も知らなかったような頑張りを子どもたちは見せてくれます。解けたと思ったところをもう一度、もう一辺、あと一回、振り返って積み重ね直した時に見える景色は、本人にしか見られないものなのかもしれません。

勉強会ではいつもこのような登山の姿が見られますが、今日書いたのは、そのほんの一部です。この日の4年生Y君の小数点の割り算、3年生Iちゃんの掛け算の筆算、そして毎回の顔ぶれひとりずつに、ここに書き尽くせない「ドラマ」があります。勉強会ですること、それは何気なく歩いてきた道を今一度振り返ってみて、自分の足跡がちゃんと付いているか見てみる。そして、あの「論語」の言葉をつぶやいて、もう一度足跡を付けに戻ってみること。

子曰わく一学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや
次の勉強会も、この言葉から始まります。

(山下あや)



私が将棋道場を担当させていただくようになってから、もうすぐ3年が経とうとしています。これまで将棋道場にはたくさんの子供たちが参加してくれました。初回からほとんど毎回のように通ってくれている子もいれば、数ヶ月に一度くらいひょこっと顔を出してくれる子もいますし、なかにはぐんぐんと力をつけて将棋道場のレベルでは物足りなくなり、実質的に「卒業」していったような子もいます。将棋道場への参加度合いは違っても、それぞれの子供たちが将棋というゲームの面白さの一端に触れてくれたのであれば、私としてはそれだけで十分に嬉しいことですし、その経験が何らか子供たちの糧になってくれるのではないかと考えています。

将棋道場を続けるなかで子供たちに伝えるように心がけてきたのは、将棋がただ単純に「勝てばいい」という種類のゲームではなく、勝負と同時に礼儀や作法が重要視されるゲームだということです。これまでも何度か山びこ通信で書かせていただいたことですが、将棋は礼に始まり礼に終わるゲームです。柔道や剣道など〇〇道とつく日本のスポーツや芸事に共通する特徴です。以前、プロ将棋棋士の羽生善治さんが将棋とチェスの違いを聞かれて、「チェスはスポーツ、将棋は伝統芸能なんですね」と答えておられたのが印象に残っています。もちろん将棋も対戦者どうしが真剣に勝負を競うという意味ではゲーム・スポーツの一種なのですが、それだけでなく、礼儀・作法・かた・美しさなどを重んずる「芸能」の要素も大きい。

テレビでプロの将棋対戦をご覧になったことがある方ならお分かりになるでしょうが、プロの対戦は非常に静かに美しく勝負が展開します。駒の持ち方、並べ方、正座の仕方、姿勢、扇子さばきなども含めて、一定の「かた」が将棋の世界にはあります。勝負がついたときにも、勝者がガッツポーズをするようなことは決してなく、敗者が静かに「負けました」と頭を下げ、勝者も静かに「ありがとうございました」と頭を下げて終わります。その後もしばらく沈黙が続き、やがて静かに感想戦が始まります。

さすがに小学生を相手にした将棋道場でそのような完璧な形式美を子供たちに要求するわけにはいきません。なにしろ元気いっぱいの子供たちですから、一局が終わるまでずっと椅子に座って勝負に集中しているだけでも大変なことです。そんななかでも最低限これだけは、と思って徹底させてきたのは、勝負が始まる前の「よろしくをお願いします」と勝負が終わったあとの「負けました」「ありがとうございました」の挨拶をしっかりとすることです。この挨拶がしっかりできるだけでも、勝負への集中度合いがずいぶんと変わってくるものです。毎回のようにこのことを繰り返し伝えてきた効果もあってか、この習慣だけはずいぶん子供たちの間に定着してきたのではないかと感じていました、その習慣から子供たちが何かしら大切なことを学んでくれればと思っています。これからも将棋が強くなるコツを教えると同時に、将棋を通じて礼儀や作法の大切さを子供たちに伝えていくつもりです。

(百木 漠)



『会員からの声』

お山の学校には一年生のときからお世話になっています。

小学校入学当初の娘は、世界を概念化するのを苦痛に感じているように思われました。彼女が生きているこの世界や、ここで起こる様々なできごとを、言葉を通して表現したり、数や量、形の概念を当てはめての理解を展開してゆくことに、興味を示しませんでした。親の未熟さから、幼少期に世界との関わりを豊かに、色鮮やかに経験させてあげられなかったことが原因なのだろう、とは分かるのですが、いくら嘆いてもその時代を取り戻すことは、不可能なものでした。

まず、宿題ができませんでした。「何？ 何？ どういう意味？」とパニック状態になり、「分からへん。」という思考停止に陥り、体をくねくねと揺すって奇声を発し、暴れました。親も大変いらいらしており、毎日ひどく怒っていました。（育児書で警告されている、やってはいけないことを、一通り、満遍なく経験しました。）

これでは親も子も共倒れになる、と、「親の意思で」大手の学習塾に入れました。しかし、当初の塾の説明は、「塾の言う通りにすれば、事物を概念にそって捉えることができるようになって、その一連の流れのなかで楽しく学べるようになる」ということだった（ように思う）のですが、実際には、ある程度インテリジェンスがないと、ついていけないようなのでした。

そんな折、お山の学校に行っている子供たちや、保護者の方のお話を聞かせていただく機会に恵まれました。どうやら、お山の学校は、先生方も子供たちも一緒になって、世の中のものごとを真摯に、ひとつひとつ丁寧に、納得のいくまで時間をかけて見ていってくださるらしいのです。ここなら、分からないことにも恐れずに取り組んでみよう、という勇気や意欲を育てなおしてあげられるかもしれません。

そうして、お山に通うようになりました。

お山も、最初は親の意思で通っていたのですが、回を重ねるにつれて、「自分から」山を登っていくようになりました。かいがのクラスでは先生方が、技術的なことの指導にとどまらず、深く豊かにこどもたちに関わってくださることに、とても感激しました。世界のものごとを細かく理解するためには、どのような斬りかたがあるのか？ そういった抽象的なこともみんな考えて、自分たちでそれを発見していくよう導いて下さったり、ものごとの裏側にある目に見えない思いや、絵画の制作過程で生まれてくる感情についても、とても大切にしてくださいます。子供たちも、自分たちを受け止めてくださる先生方の大きさや、お山の豊かさに囲まれ、安心して学びに向かえるのでしょう。毎回、普段の生活では見せることのない、清々しい顔をして、お山を下りてきます。親のほうも、子供のそんな表情を見ることができ、お迎えが楽しいのです。

3年目になり、家での学習態度も変わってきました。年齢を重ねて、思考の段階が発達した、ということもあるのかもしれませんが、それだけでなく、学習に取り組む姿勢自体が変化したように思います。分からないけれど、ちょっと立ち止まって、考えてみよう。そんな意識が生まれ、パニック状態になることも、格段に減りました。

お山の学校では、受験に役立つような勉強というよりは、生きる力を育てていただいているように思います。親だけでは、できなかったことでした。先生方に、感謝を致しております。ありがとうございました。これからも、どうぞよろしくお願ひします。

(I.K.さん・保護者)——2013年1月

『自分の人生のために学ぶこと』——Non scholae sed vitae discimus.

山下太郎

『論語』の冒頭では、学びの楽しさが独特な仕方語られる。まずは復習することの喜びが、続いて同じ志を持った仲間が集い、切磋琢磨することの楽しさが示される。そして、このような自分たちの努力を他人が知らなくてもまったく意に介しないこと、それは、まことに君子（立派な人間）にふさわしい態度ではないか、と締めくくる。

学ぶこと自体が文句なく楽しい。世間の評価は二の次、三の次という言葉は歯切れ良く、力強い。

その中に出てくる「朋遠方より来る有り」という言葉。じつに山の学校にふさわしい表現だ。片道三時間かけて通う人もいる。山の上の校舎まで、歩いて上るほかない山道が続く。近隣の人でも心理的な距離は格段に遠い。そこを子どもも大人も登ってくる。試験もない、資格が取れるわけでもない。では何のために？

セネカは言う、われわれは人生のためでなく学校のために学んでいる、と。世間の評価を求めて学ぶのは本当の学びの道ではない、大事なことは「世間でなく、自分の人生のために学ぶことだ」(Non scholae sed vitae discimus.)。そう彼は説いてやまない。まったく二千年前の言葉とは思えない。

翻って山の学校のモットーは「ディスケ・リベンス」。「楽しく学べ」である。一方、「楽しんで学べ」という立場もある。汗をかいて山道を切り切った者にしかわからない喜び。ドライブウェイで山頂についた者にはわかるまい。山頂でスタンプを押してもらい、急いで次のバスに乗り込む者たち。いつまでも景色を眺め楽しむことは御法度だ（パン食い競争で、パンは味わうな、食いちぎって走れ、と言われるのと同じである）。

学問にせよ芸術にせよ、およそ人間の技術が関与するところ、進んで苦勞する喜びがある。失敗をもともせず苦勞を乗り越えて得られる喜び。幼児もしかり。何度も失敗した末に自転車に乗れる喜びを進んで味わおうとする。登山者しかり、学びの山道を登る者しかり。通底する真理は一つである。

「楽しく学べ」(ディスケ・リベンス)は、「進んで学べ」と訳した方が本来のニュアンスがよく出るように思う。実際、自ら進んで学ぶところに人間本来の自由が広がる。塗り絵は自由ではない。白い紙に絵を描くところに自由がある。この自由を分かち合う者同士が集い、切磋琢磨して、学問の進歩と発展を生んできた。今までも、そしてこれからも。

文化を築く主役は、時代の声には耳を貸すまい。「自分は自分、他人は他人」で押し通す。これが「進んで学ぶ」者の合い言葉だ。世間は早く花を咲かせよとせき立てる。だが、花を咲かせるのは、畢竟シロを愛した花咲かじいさんにしかできぬ相談だ。目的を設定し、ノウハウをまねるだけの欲張りじいさんが集まっても、灰をまき散らすことしかできないだろう。

一人一人が自らの尊い学びの魂を守り育てたい。それが学問の自由、学びの自由を守る大道につながると信じつつ。それが、人間の尊厳と自由の輝きを守る道に他ならない、そう信じるすべての人たちの気持ちを代弁するのが、ラテン語の「ディスケ・リベンス」である。もう十年。まだ十年。これまでお世話になったすべての人に感謝を捧げつつ、今までと何一つ変わらぬスタンスで新年度のスタートを切りたいと思う。

(山の学校代表・山下太郎)

——本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。
"Disce libens. (楽しく学べ)" がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです(春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月)。ホームページでも、クラスの様子やイベント(毎月開催・無料)の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない!もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko>